
魔法戦士リリカルなのは-宙を見上げる無限のワルツ-

山田せびあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦士リリカルなのは - 宙を見上げる無限のワルツ -

【Nコード】

N 3 6 7 9 M

【作者名】

山田せびあ

【あらすじ】

新暦0075年

ジェイル・スカリエッティ率いるナンバーズと、時空管理局側の機動六課の戦いが終わり、数ヶ月。

戦いの爪痕はほとんど消えうせ、人々の間に平和が戻ってきた。

そんな中、独りの男が機動六課に訪れる。

その男は、10年前の闇の書事件で行方不明となった、八神はやての兄だった。

この作品は、『魔法少女リリカルなのは』Stand by me x Stand up to『魔法少女リリカルなのはStrikerS』三人目のイレギュラー』と同じ世界の物語です。登場人物や設定が被っているものもありますが、それは仕様ですのでご了承ください。

0・0『ビフォア・ラスト・スパーク』

あるところに、とある兄妹がいた。

その二人はいつも仲が良かった。

妹は足が不自由だが兄の助けもあり普通の生活をおくれた。

苦しくもあつたが、それ以上に楽しい毎日。

二人は二人で入れればそれでよかった。

そんなある日の夜。

魔本が覚醒する。

その名を『闇の書』という。

そこから顕れた守護騎士。

闇の書は大量の魔導師と呼ばれる超常の力、すなわち魔法を操る者、もしくは魔法生物がもつリンカーコアと呼ばれるエネルギー器官から魔力を奪い、主が莫大な力を得るというもの。

しかし、現在の主である妹はそんなことは望まず、魔力を集めたりせず、「家族が増えた!」、と喜び、いままでより楽しい生活をおくっていた。

ある日、妹が倒れた。

連絡を受けて慌てて病院へ行くと、そこには、ベッドで苦しそうに横たわる妹。

医師いわく、足の麻痺が臓器にまで広がり、生命機能に支障がでて、

最終的に死亡する。と。

足の麻痺は闇の書のせいだった。

魔力を集めなかったため、主からエネルギーを吸い取っていたらしい。

それからただがむしゃらに魔力を集めた。

ただ助けたかったから。

誰よりも大事な妹だったから。

時空管理局という警察機関の隊員を襲い、魔法生物を襲った。

何人も、何人も、何人も。

そして、白と黒の魔導師に出会う。

何度もぶつかり合い、戦い、傷付き、傷つけあい、最終的には和解した。

が、遅すぎた。

時空管理局の提督の手により、闇の書は暴走し、世界を喰らい始める。

飲み込まれていく黒の魔導師。

何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ
何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ何度モ。

攻撃を繰り返し、決して諦めなかった。

そして響く愛する妹の声。

あの幻影を打ち砕け。

戦いは海上へと変わる。

場所が変わろうが、構わず繰り返す攻撃。

ついには、黒の魔導師が復活する。

それと共に蘇る、純白と漆黒を合わせ持つ我が妹。

戦う覚悟と共に再び戦場に舞い戻る戦死達。

巨大かつ強大な障壁を張って待ち構える悪魔。

『全ての障壁を破壊し、軌道上に転送し、戦艦アースラのアルカンシエルで消滅させる。』

最後の戦いだ。

1・0『クライマックス・マキシマム・プレイヤー』（前書き）

改訂ばん

1・0『クライマックス・マキシマム・プレイヤー』

闇の書、防衛プログラム。

その姿は生物だった。

いや、あれは生物なのだろうか。

この世の全ての生物を混ぜ合わせたかのような毒々しい姿。

闇の書の最後のプログラムが咆哮をあげる。

「『チェーン・バインド』ッ！」

「『ストラグル・バインド』ッ！」

アルフとユーノ。

それぞれのバインドが絡み付く。

「『鋼のくびき』ッ!」

ザフィーラが水面から刃を生み出す。

まるで地獄にあるという針の山のように防衛プログラムの触手を貫き、射止め、切り刻む。

「鉄槌の騎士、ヴィータと、鉄の伯爵、グラーファイゼンッ!」

生み出されるは巨大なハンマー。

「『轟天爆碎』ッ!」

それを大きく振り上げる。

高く掲げたそれは、大型トラックの比ではない。

まるで巨大なビルを振り回しているかのようだ。

「『ギガント・シュラー……ーク』ッ!」

防衛プログラムに向かっておもいつきり振り下ろす。

砕くことを主としたハンマー相手になすすべもなく障壁は砕け散る。

「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、いきますッ!」

顕れる桜色の魔法陣。

ガシャン、という音が複数回して、レイジングハートから桜色の翼が伸びる。

レイジングハートの先を防衛プログラムに向けて構える。

「『エクセリオンバスター』ッ!!」

先端に桜色の魔力が集束される。

「『ブレイク・シュート』ッ!!!!」

溢れ出る光の奔流。

桜色の輝きは、障壁にぶつかり、二枚目を吹き飛ばした。

「剣の騎士、シグナムが魂、炎の魔剣、レヴァンティンッ!」

レヴァンティンを頭上に掲げる。

「刃と連結刃に続く、もう一つの姿」

レヴァンティンの柄尻に鞘を装着する。

一度全体が輝き、おさまった時、レヴァンティンと鞘は合体し、弓になっていた。

矢を生み出し、防衛プログラムに向けて引き絞る。

ギリギリ、ギリギリと。

「『翔けよ、隼』ッ……！」

放たれた矢は輝きを増しながら一直線に防衛プログラムに吸い込まれていった。

巨大な爆発とともに、三枚目が碎ける。

「バルディツシュ！ザンバーフォーム……！」

バルディツシュが変形する。

鎌から巨大な大剣へと。

「フェイト・テストロッサ、バルディツシュザンバー！行きます……！」

足元に金色の魔法陣。

撃鉄が荒々しい和音を奏でる。

「撃ち抜け、雷神……！」

金色の魔力刃が伸びる。

伸びた魔力刃は、バリアを切り裂き、防衛プログラムの脚や触手をまとめて切り落とした。

防衛プログラムからさらに太い触手が生まれる。

その触手が光線を放とうと魔力を溜め始めた。

「盾の守護獣、ザフィーラッ！砲撃など撃たせんッ！！」

ザフィーラが純白の魔法陣が展開される。

顕れた柱が、触手を貫いて動きを止めた。

それと同時に霧散していく魔力。

「『彼方に来たれ、宿り木の枝。銀月の槍となりて撃ち貫け』ッ！」

次にはやて。

ザフィーラと同じく、白い魔法陣を展開する。

防衛プログラムの真上に、七つの白い光が生み出された。

「『石化の槍、ミストルティン』ッ！！」

防衛プログラム貫き、貫いた箇所から石化を開始する。

すると、石化を破ろうと、防衛プログラムから、さらに生物の一部や機械のようなものが次々伸びる。

石化してしまった部位を砕き、内側から新しいパーツを作り、埋めようとしているのだ。

「うわー！なんか凄い事になってるよ！」

実際ドン引きするくらい気持ち悪い。

「やっぱり並の攻撃じゃ通じない」

「だが、攻撃自体は通っているッ！プラン変更はなしだッ！」

クロノがグレアム提督から渡された杖、デュランダルを携えて、エイミィに応えた。

「『悠久なる凍土、凍てつく枢の地にて、永遠の眠りを与えよ』」

凍り付く海。

「凍てつけ……！」

『ETERNAL COFFIN』

そのまま防衛プログラムをも凍らせた。

それでも、まだ止まらない。

また内側から体を生み出す。

「行くよ、フェイトちゃん、はやてちゃん！」

「うんッ！！」

なのはの言葉に、二人は頷いた。

三人の前に魔法陣が展開される。

三者三様。

それぞれの魔力が集束される。

「『全力全開！スターライト——』」

高らかに、

「『雷光一閃！プラズマザンバー——』」

シャルガのコアを捕らえる。

「『長距離転送』ッ！」

「『目標軌道上』ッ！」

ユーノとアルフが転送座標を入力する。

「『『転送』』』！！！！」

シャル、ユーノ、アルフの三人によってコアは虹色の煌めきと共に夜空の向こうに消えていった。

+++++

「……………後はアースラの仕事だな」

クロノが言う。

「やれることはやった。きっと大丈夫だよ」

ユーノが笑う。

「……………そうだな」

しかし、浮かない顔のクロノ。

「?どうかしたのクロノくん？」

心配そうなのは。

「…………いや、気になる事があって」

「え？」

「このまま終わってくれるといいんだけど……………」

その時、空中にウィンドウを開いた。

『クロノくんッ！大変ッ！』

焦った声で叫ぶエイミィ。

「まさかッ！」

『防衛プログラムのコアを解析したらかなり強力な魔法無効化フィールドがコアの周りを囲んでいるの！このままじゃアルカンシエルを撃つても無効化されちゃう！』

「なんだってッ！？」

場に衝撃がはしる。

ここにいるメンバー全員の攻撃を喰らったはずなのに、確実に障壁を破壊し、本体も焼き尽くしたのに。

まだ、終わってない。

「奴は完全に最終形態にはなってなかったんだ……………」

「最終形態？」

クロノは空中にウィンドウを出す。

「ほら、ここ。最終形態になると、魔法を直に吸収するって書いてある。ギリギリ形態変化が終わって三人の砲撃を少しだけ吸収できた。だからまだ活動出来たんだッ！」

皆はさっきの攻撃で、魔力を使い果たしてる。

魔法無効化フィールドを抜くほどの攻撃は出来ないし、できたとしてもコアは軌道上。

とどかせることは不可能だ。

「…………クソッ！完全に手詰まりだッ！なにか、なにか方法は無いのかッ！」

そんな中、異変に気づいた者がいた。

「……………けいじ兄がおらん。」

その言葉に皆がはっとする。

そこには、はやての兄。

八神 圭治がいなかった。

そして、空に昇る光りが一筋。

……………どこにいるかは明白だった。

2・0『スペース・ハイヤー』

空に舞い上がる一つの光。

真っ直ぐに防衛プログラムを目指している。

（……………大気圏を抜けたか。）

体にかかる重力が無くなり、さらに加速する。

『おい！圭治！』

「クロノか……………なんだ？」

『お前、どうするつもりだ！』

なんだ、そんなことか、と言わんばかりに言う。

「奴に砲撃をしかける。俺の……………レアスキルだったか？……………それを使えば、アルカンシエルまではいかなくても、レーザーで奴を焼く事ができる。」

『そんなことをしたらお前がッ！』

さらに声を荒げる。

「……………多分大丈夫だろう。それよりアースラへの指示を『強がり』は止せ！……………」

一瞬で看破された。

『宇宙空間でそんなものを使ったら主治は魔力切れになる！帰るところか生命維持に支障が出るんだぞ！？』

それに、とクロノは続ける。

『はやては、お前の妹はどうするつもりだ！』

「……………クロノ。」

その言葉には確かな覚悟があった。

「はやてを……………頼んだぞ。」

『けいじに』

ブツッ

強制的に通信を切る。

最後にはやての声を聞いたら、……………泣いてしまいそうだったから。

顔を何かが撫でる。

どうやら遅かったようだ。

「目標を肉眼で確認。」

視界の先でうごめく防衛プログラム。

半分近くを再生していた。

「これより、目標を破壊する。」
そこで言葉を切り、

叫ぶ

「八神 圭治！GX - 9900！Rock・n・roll Ba
by！」

3・0『レア・スキル』（前書き）

前フリが長い

一応今はプロローグ的なものです

本編はSTSになります

3・0『レア・スキル』

「バレル展開！エネルギー充填完了！」

アースラの中に声が響く。

「わかりました。そのまま待機。何時でも撃てるようにしておいて。」

「

ふう、と息をつくリンディ。

「クロノくんが合図が来るまで撃つなって言ってたけど、どうしたのかな？」

クロノは圭治が防衛プログラムに向かった事実を伝えてない。

そのほうが、彼が動きやすいと思ったからだ。

「でもまあ、クロノが言うのなら、待ちましよう。」

二人がこの調子なので、アースラスタッフも緊張が少しほぐれたようだ。

「艦長。彼、圭治のレアスキルって何なんですか？」

当然の疑問とも言える。

今まで守護騎士が順調に魔力の採集を続けてこれたのは、八神 圭治のおかげと聞いていた。

しかし、たった一人で時空管理局の魔導師や多数の魔法生物を抑えられるわけがない。

ならば、いったいどんな能力なのか。

「彼の能力は『存在しない兵器の生成』よ。」

「存在しない？」

頭に湧いた疑問を繰り返す。

「そう。わかりやすく言うなら、拳銃は作れないけどレーザーガンなら作れるってこと。」

「確かにレーザーガンは開発されてませんが………つまりは架空の兵器を現実にも生み出せるものなのですか？」

「そうとも言えるけど、彼の能力はその武器がこの世に存在する唯一のものじゃなきゃならないのよ。つまり、彼がレーザーガンを作れても、誰かがそれを開発したら、彼の能力で同じ物を作ることとは

二度と出来なくなってしまうのよ。」

「あまり使い勝手は悪そうですね。」

まあね、と返してモニターを見る。

そこには再生中の防衛プログラムと、

12体のロボットが映っていた。

4・0『エンド・オブ・サテライト・キャノン』（前書き）

プロローグ：

闇の書事件終了になります

次からストライカーズへ

4・0『エンド・オブ・サテライト・キャノン』

「MSビット!」

その声と同時に虚空より顕れる12の影。

それはロボットだった。

背中に真上と左下を指す機具が付いている。

さらに注目するべきは、背中のキャノン砲だろう。

その身長と同じくらいの大きさの砲身が右肩から左下へ斜めに伸びている。

「オペレーションO!」

すると、全部のMSビットの背中の機具が回転、展開し、さながらアルファベットの・X・のようになった。

そのXの面から透き通るような白の力場が放たれ、全てのMSビットが防衛プログラムに向かって飛ぶ。

やがて、防衛プログラムを四方八方から囲い込む。

「マイクロウェーブ！」

MSビットの胸部のパーツが開いて、翡翠のような水晶体が表れる。

そして、どこからともなく降り注ぐ蒼い光りが水晶体に吸い込まれる。

「バレル展開！ロックオン！」

背中 of 機具の力場を放っていたほうが反転し、前方に向けられ、巨大な砲頭が防衛プログラムに向けられる。

準備はできた。

「GX-9900！」

圭治の背中に、MSビットと同じ砲台が顕れる。

しかし、若干デザインが違う。

MSビットの物より、強力な印象をつける。

「フルアーマー！」

砲台を中心に全身が輝き出す。

光りが収まった頃には、全身が機械の鎧に覆われていた。

左右対象のボディ。

胸の翡翠。

左手のシールド。

そして、頭部の四本の金色の角。

「マイクロウェーブ、チャージ！」

胸部パーツが開き、マイクロウェーブが凝縮される。

バレルを展開。

砲頭を防衛プログラムへ。

とっさに頭に浮かんでくる仲間の顔。

頭を二、三度振って思考を外へ追い出す。

深く息を吸って、

吐く。

「『サテライトおお………』」

しっかりと目標を見据え、

「『キヤノオオオオン！！！』」

撃ち出した。

轟音。

爆発。

閃光。

全てのMSビットと己のサテライト・キャノンが放たれた。

「前方に熱源を確認。総員衝撃にそなえてください！」

ブリッジにそんな声が響いた、次の瞬間。

凄まじい揺れがアースラを襲った。

書類はばらまかれ、コップは宙を泳ぎ、パネルは火を噴いた。

明かりはほとんど落ち、非常事態を知らせる赤色灯しかついていない。

「損傷は!?!」

混乱の中、リンディは近くにいたスタッフに尋ねる。

「コントロールシステムにダメージ! なっ、……………まずい!」

「どうしたの?」

「誤作動でアルカンシエルが発射されます! このままではッ!」

アースラのスタッフと、地上にいるなのは達に、衝撃が走る。

『そんなバカなッ! エイミイ! 直ぐにコントロールを!』

「やってるよ！けどプログラムが破損してて！」

さらに慌てるエイミー。

『お願いはやくして！あそこには圭治くんが！』

なのはの痛々しい叫び声。

「くッ！」

あの光をみたときにもしやと思ったが、本当だったようだ。

「スラスターを使ってアースラの向きを変えて！」

「ダメです間に合いません！アルカンシエル、発射します！」

爆煙がはれる。

そこには防衛プログラムの破片。

（もう俺の魔力はすっからかんだ。アースラにいけば帰れる。）

防衛プログラムは完全に破壊した。

「ミッションコンプリート。……………やっぱ俺ってば、不可能を可能に、」

突然背後が明るくなる。

そちらを振り向く、

目の前に広がる光の塊。

それがアルカンシエルだと認識するまえに、

魔力光が視界をつめつくした。

「けいじにiiiiiiii! ! ! !」

これが、約10年前。

後に、『闇の書事件』と呼ばれた事の顛末である。

第一章 1・0『ケーン・エイト』

「いやー！ やつと終わったよ！」

「スバルさん。早く食堂行きましょう！」

機動六課。

騎士カリムの予言に対処するために生まれた部隊である。

しかし、本局に提出している書類には、『独立性の高い少数精鋭の部隊の実験』としている。

これには騎士カリムの予言を地上本部が信用していないためである。

あくまで『実験』なので、機動六課が存在するのは一年間のみ。

ついこの間、『ジェイル・スカリエッツィ事件』を解決し、普段の業務に戻って、約二週間。

機動六課解散まで残り数ヶ月となっている。

「ティア。なのはさん達って出張どのくらいだっけ？」

「一ヶ月よ。」

「結構長いですね。」

「でもエリオくん。シャルさんは代わりに人が来るって言うてたよ?。」

事件の直後に、高町なのは、フェイト・T・ハラオウン、シグナム、ヴィータの四人は事後処理のため、一時的に本局勤務となり、教導要員がいないのだ。

「とにかく、なのはさんから指示されたメニューはこなしたんだし、ご飯いこうよ!。」

《食堂》

「こら、スバル。あまりいそぐと」

ティアナがたしなめるが、

「むぐっ!ん~~~~!ん~~~~!」

スバルが喉を押さえて苦しみ始めた。

「す、スバルさん!? キャロ! 水! 水!」

急いでコップに水をつぎ、スバルに渡す。

スバルは引ったくるようにコップを掴むと、いつきに飲み干す。

「んぐ、んぐ。プハー！死ぬかと思った！」

「……………一回死んだら？」

「うえゝゝゝんエリオゝゝゝティアが冷たいよゝゝゝゝ」

「あ、は、は、は」

苦笑いを返すエリオ。

実はさっきの訓練で、スバルが誤ってティアを吹き飛ばし、海に落としてしまったのだ。

冷たくなるのも無理ない。

『四人ともそろっとるか？』

そんな取り留めのない日常の中。

一つの報が入る。

「あ、はい全員います。」

虚空にディスプレイが表れ、そこに茶髪の女性が映る。

この京訛りの女性こそ、機動六課の部隊長。

八神 はやてだ。

「後でウチのここに来てくれるか？紹介したい人がおんねん。」
「わかりました。」

四人は急いで食事を済ませ、はやての所へ向かう。

《部隊長室》

「実はな、今日の午後からなのはちゃんの代わりの教導官がくるんですよ。」

「「「「はい？」「」「」

はやての話はこうだ。

その人物は、先日のジェル・スカリエツィ事件の時に、機動六課の戦闘を見て、思う所があったらしく、それを埋めるために来る、とのことだった。

「誰が来るんですか？」

「白兵戦と戦略の教導で、右に出るものはいないと言われとる。ケーン・エイト教導官や。」

「『『『え？』『』『』』」

二度目のクエスチョン。

しかし今度は困惑が先行しているようだ。

ケーン・エイト教導官。

通称、『赤服のケーン』。

その昔、任務中の怪我により手術を受けたその日の夜。

とあるテロ組織が、ケーンを殺そうと動く。

その数は、百人近いとも言われている。

そして、テロ組織を拳一つで、その手術衣と包帯が血で真っ赤に染まるまで戦ったという人物だ。

しかし、彼女らは別の異名を思っていたようだ。

「白兵戦の鬼教官……………」

ティアナが呟く。

「確か、あれだよな？ 教導を受けて二日で八割が病院送りになって、その半分以上が管理局を辞めたっていう……」

冷や汗が滝のように流れ落ちるスバル。

「わ、わたし、だめかも」

今にも気絶しそうな顔をするキャロ。

その横でフリードもきゅくると、不安そうに鳴く。

「な、なに言ってるんですか。のぞむところですよ！」

明らかに震えながら、強がりと言う。

誰が見ても、無理をしてるのがまるわかりだ。

しかし、それに応える声があった。

「そうか。なら、エリオ・モンディアルには特別コースを用意しよう。」

その場が凍り付く。

ギギギ、という錆び付いた機械のような実にゆっくりとした動きで、振り返る。

そこには一人の男がいた。

突然顕れたかのように、部屋の空気をがらりと変えた彼の周りには、凍てつく銀のオーラが見える。

体が硬直して敬礼すら出来ない。

「模擬戦でもやってみるか？」

まるで死刑宣告のようにケーン・エイトは告げた。

2・0『バトル・アビリティー』（前書き）

孫市の専用アイテム

通常弾がロケット弾に

正直微妙。

はじめての戦闘描写です。

可愛がってください。

2・0『バトル・アビリティー』

「準備はいいか？」

「『ハイ！』」

ケーンは制服のまま。

FW陣は、バリアジャケットに着替えて隊舎の外の訓練所に来ていた。

いわく、特殊な技術とやらで地形を自由に変える装置で、フィールドを市外地に設定されている。

その大通りの真ん中に立つ。

「各自、自由に配置につけ。90秒後に開始する。カウントは部隊長に任せる」

「わかったで。せやけど部隊長なんて言わんで、フツー呼んでもらえるか？」

微かに微笑みながら、言う。

「了解した。はや……………八神」

「はやてでええよ？」

「……………すまん」

微妙ないごごちの悪さを感じながら、彼は時間がたつのを待つ。

……………

時間だ。

『時間や。模擬戦開始！』

その言葉の直後。

バンバンバン！

魔力弾が飛んできた。

それを軽くステップを踏みながらかわす。

「フリード！お願い！」

「グゴアアア！」

やたら巨大化した白竜が頭上から迫る。

頭突きをするように突っ込んでつてきたフリードを避けるように、大きく後ろに下がる。

すかさず着地点に魔力弾が撃ち込まれる。

足元の急な凹凸に気を取られ、よろめいてしまう。

フリードが炎を吐き出す。

巨大な炎の塊が真っ直ぐに迫る。

単純だが、バランスが崩れた今なら直撃する。

彼は身構え、右回し蹴りを放つ。

その蹴りは炎弾を一閃し、消し飛ばした。

直ぐ目の前にスバルと後方にエリオ。

フリードの攻撃に合わせた突撃。

自分より強者に対して使う短期決戦用の作戦だ。

またもや回避が取れない。

単純に蹴りの直ぐ後ということもあるが、挟み撃ちになってるのも一つの要因だ。

一人を避けても一人が確実に仕留める。

なかなかいい作戦だと、ケーンはひそかに感心していた。

スバルが目の前に高濃度の魔力球を出す。

エリオは自身の槍型デバイス、ストラーダの強化をする。

三人の距離が零になる。

「デイベイン・バスター!!」

「はあああああああ!!」

巨大な粉塵が立ち上る。

たちまち視界を零にする。

正直、ティアナはやり過ぎたと思った。

教導官といったら、なのはのようなイメージがあるので、エースと

呼ばれる彼女ほどとはいかなくても相当強いはず、と思つての作戦だった。

噂の上でもかなりの実力者だと聞いていたからだ。

しかし、結果はどうだろうか。

戦略の専門家のはずが、まだまだひよつこのティアナの作戦にまんまと引つ掛かり、攻撃を避けずに直撃。

白兵戦の鬼なら、避けることは朝飯前だろう。

でも、回避の一つもせずに、直撃。

まるで、わざと受けたように。

そこまで考えて、彼女ははっとする。

「スバル！エリオ！急いで回避を

次の瞬間。

スバルとエリオは宙を舞っていた。

「なん！？」

その数秒後。

一瞬だけ粉塵が渦を巻いて、

意識が消失した。

2・0『バトル・アビリティー』（後書き）

難しい。

ほとんど一言描写。

完結できるかかなり不安。

正直、悪いことしか思い浮かばない。

そんな自分、修正してやるッ……！

3・0『オールマイティー・ティーチャー』（前書き）

メモリースティックが消えた

DIVA 2ND ができない

（T・T）

3・0『オールマイティー・ティーチャー』

スバルとエリオは、目の前の光景が信じられなかった。

渾身の一撃を止められたからからではない。

ケーンの腕が弾け飛んだからだ。

非殺傷設定であるにも関わらず、スバルの拳を受け止めてる左手の皮膚をねこそぎ吹き飛ばし、血液と脂肪でぐちゃぐちゃになっていた。

エリオのストラダーも右手の平に深く突き刺さっていた。

夥しい量の血液を流しながらも、彼の表情にはなんの変化もなかった。

その毒々しい傷に覆われた手の平に触れている嫌悪感から、直ぐに拳と槍を遠ざけようとする。

しかし、ケーンはそれを許さない。

離そうとする二人を逆にガツチリと物凄い力で掴んだ。

そして、彼は右足をエリオに踏み出す。

エリオは、それを見て、驚愕した。

フリードの炎により、やけただれた脚。

その黒く焦げ付く肌の奥に、なにやら金属のようなものが見える。

（まさか、戦闘機人！？）

「……………」『ネロス』」

ケーンが呟く。

と、同時に、彼の脚が一瞬だけ陽炎のようにゆらめき、次の瞬間にはビーム砲が付いた鋼鉄の脚があった。

「『銀色の脚』」

砲台が火を噴く。

放たれたビームは、エリオの腹を直撃し、ビルの中へと吹き飛ばした。

急に吹き飛んだエリオを見て慌てるスバルに眼を向ける。

それだけで、スバルは動かなくなる。

さながら蛇に睨まれた蛙、といった状況だ。

「『シャイニング』」

スバルの拳を左手でつかみ取りながら、右手を引く。

すると、右手全体を覆うカバーが付いた機械の腕になった。

「『黄金の指』」

カバーが開く。

指間接が外れる。

その五指は閉じられないことない。

「『シャイニング・フィンガー』！！」

ケーンの掌が発光する。

左手をおもいつきり引くと同時に輝く右手を突き出す。

その掌は、スバルの胸に吸い込まれ、エリオより遙か遠くに飛び、ビルを突き破り、海に消えた。

+++++

（戦闘機人か………的外れではないがな）

彼は、人口スキンを剥ぎ取った。

そこにあつたのは黒い義肢。

両手両足、そして腹の一部。

過去の戦闘による傷痕だ。

（大人の身勝手で傷つくのはいつも子供だ。こいつらのようにな）

そこには、フォワードの四人がベッドに寝かされていた。

ぐっすりと眠ってる所を見ると、相当疲れが溜まっていたのだろう。いくら魔導師が少ないとはいえ、年端もいかない少年少女を戦場に向かわせるなんて、と思うところもある。

できれば、若者には若者らしくしてほしいものだ。

+++++

「……………ん……………ん？ここは？」

エリオが天井を眺めながら意識を覚醒させる。

「医務室だ。お前が最初に目が覚めたか。」

横には、ケーンが座っていた。

「随分ぐっすりおねむだったようだが、そんなに激務なのか？ここは」

字面だけ見れば皮肉たっぷり聞こえるが、その声色はむしろ気遣うようだった。

「……………いえ、確かに復興支援のための仕事は増えましたけど、全体で見ればあまり変わってません。日頃からしごかれた疲れの方が」

「あいつの教導は、地道な基礎の繰り返しだから、肉体的により精神的に疲れるメニューが多い。だから長い時間を睡眠にあてることが多くなる。ゆっくり休め。」

「ありがとうございます。でも大丈夫いだ！」

ベッドの上で足を押さえ痛がる。

つったのだろう。

「そのままにしてろ。」

ケーンはエリオの足を掴んで真っ直ぐに伸ばし、アキレス腱を張るように足首を曲げる。

「——ッ、ふう」

痛みがなくなったのか、荒くなった息を整える。

「体にガタがきてる。俯せになれ。マッサージをする。」

エリオは素直に俯せになる。

その上にケーン馬乗りになり、足裏からふくらはぎ、太股、尻、背中、首、腕などまんべんなくマッサージをしていく。

「こつてるな。訓練のあと、毎回ストレッチをしたほうがいい。」

「ん……いった」

「我慢しろ」

「……………前の部隊でもマッサージをしていたんですか？」

「……………いや、やってない。」

「なんですか？こんなに上手いのにな」

「……………ほとんどが女子なんだよ。」

「……………ああ、なるほど。
わかります。大変ですよね」

「組み手ですら痴漢あつかいされるし、攻撃魔法を一発あてたら『さういて』とか言われるし、マジで一回焼きを入れたらほとんどやめるし。だったら最初から入んなくてそう。思わないか？」

噂の真相なんてそんなものだ。

「おっしやる通りです。」

強く言うエリオ。

仲間を見つけたかのような瞳。

「まさか、お前も一人か？」

「はい」

ここに、漢同士の熱い友情が生まれた。

+++++

黒い意識の海の中から、ティアナは覚醒する。

鼻につく消毒液の臭いで、ここが医務室であることに気づく。

まだ体は動かないが、首はなんとか動かせる。

右を向くと、スバルがいた。

何故か顔を真っ赤にさせながら。

(……………どうしたの?)

(いや、その、エリオとケーンさんが……………)

いぶかしげにスバルを見る。

すると、

「だ、だめですよ」

「男の子だろう？これぐらい我慢しろ」

驚愕に目を見開く。

「あ、そこは」

「ほう、もう気持ち良くなったか。」

「んッ！もっと優しくしてください」

「これでどうだ？」

「ああ、気持ちいいですう」

ティアナの位置からは机が死角になって、寝そべったエリオと馬乗りのケーンの頭が見える。

ちょうど、何かが行われているであろう場所は、幸か不幸か見えなかった。

エリオの上気した頬。

艶やかな嬌声をあげながら、充たされるような表情をしている。

ケーンは獰猛な笑み。

エリオに馬乗りになり、色んな所をまさぐっている。

手を動かすたびにエリオがびくびくと痙攣する。

「はあはあ、ケーンさん。ぼく、もう」

「それじゃ行くぞ。最後の仕上げだ」

「ケーンさあああん！」

「なにやってるんですかーーーーーッ！……！」

勢いよく跳ね起きた。

「……………なにつて。マッサージだが。」

今度はティアナが真っ赤になる番だった。

3・0『オールマイティー・ティーチャー』（後書き）

出してほしいガンダムをリクエストします

作品とガンダムの名前を書いてください

m () m

4・0『バトル・イン・ザ・フォレスト』（前書き）

リクエストにお答えして、08を出させてもらいました

皆様の暇つぶしになれば幸いです

では、ごゆるり

4・0『バトル・イン・ザ・フォレスト』

「さて、お前達の実力は昨日見させてもらった。今日は今後の訓練メニューを言いたいと思う」

模擬戦の次の日の朝。

ケーンは、会議室に皆を集めた。

「お前達に圧倒的に足りないのは経験だ。昨日のも悪くはないが、テキスト通りの解答だった。ゆえにわかりやすい。つまりは、あらゆる状況に臨機応変に対応することが出来るようにするのが、今後の課題だ」

全員が真剣に聞く中。

彼は、備え付けのモニターを起動する。

「メニューは、はっきり言えば模擬戦しかない。基礎は出来てから俺が口出ししても意味がないからだ」
画面に何枚かの画像を出す。

「俺はこの北の端にいる。1時間で設置してあるフラッグを奪取、もしくは破壊しろ。」

その時、ずっと手が上がる。

「なんだキャロ。」

「あの、1時間フラッグをとれない場合以外に敗北条件ってありますか？」

「ふむ。なら、お前達が撤退を判断したときと、気絶などで全員が戦闘不能になったら負けだな。ああ、それと罰ゲームを用意しておこう。」

「罰ゲーム、ですか？」

ティアナがいぶかしげに呟く。

「そうだ。ペナルティがないと人は何度もチャンスがあると思って油断するからな。後ではやてと相談して決める」

さっ、と顔を真っ青にする四人と一匹。

ケーンはそれ以上つつこまなかったが、心あたりでもあるのだろう。

「じゃあ、そっそく行つ。各自、訓練所に集合」

+++++

「みんな。配置ついた？」

『おっけーだよ！』

『大丈夫です』

『配置つきました』

「それじゃ、作戦開始！」

今回のステージは、ジャングルだった。

西に濃いブッシュ。

うつそうと生い茂る森と、清らかな清流を挟み、東には崖。

その上には湖。

そのの、さらに北、俗に三角岩と呼ばれる岩がある丘の頂点にケーンはいた。

「『陸戦型』」

地面に寝そべる。

すると、中央にV字のアンテナが付いたバカデカイヘッドギアが装着される。

「マジックサーチャイ。起動」

スイッチが入り、視界が広がる。

このヘッドギアは半径3キロまでなら、僅かな魔力反応も探し出すことができる。

ピピッ。

早速反応がある。北を12時とおいて8時方向。

残念ながら、数を知るほど高性能ではないが、方向だけで十分だ。

「『ロケットランチャー』」

砲身が約80センチ程の短いロケットランチャーが顕れる。

砲身が短い分、命中精度は低いがそれでもいい。

ケーンはロケットランチャーを構えると、フォワード陣がいるであろう場所にぶっ放した。

+++++

スバルはティアナに指定された位置で待機していた。

前衛であり自分が何故後ろにいるかは分からなかったが、取り合えず待つ。

すると、どこからか、ひゅーっっ、という風をきる音が聞こえた。

「なにか来る……………あッ！」

真っ直ぐに飛んでくるロケットランチャー。

「うそ——————ッ！」

横の岩影に飛び込む。

と、同時に爆発。

地面に巨大なクレーターを作った。

「昨日も思ってたけど、ビーム砲とかロケットランチャーとか質量兵器じゃないの!？」

ちなみに、質量兵器とはミサイルやマシンガンなどの実弾兵器のことである。

比較的、安価で手に入りやすく、誰が使っても同じ効果を得られることから、犯罪に使われることが多いため、管理局では厳しく規制をされているものだ。

しかし、彼のそれはレアスキルによって生成されるものなのでギリギリ規制には引っ掛からない。
すると、第二波が襲い掛かる。

「うわッ!とにかく急いで移動しないと」

+++++

(8時から6時への移動を確認。4時方向の崖の下にも反応。……やるか)

「『180mmキャノン』」

すると、ケーンの手からロケットランチャーが消え、巨大な対装甲ライフルのような銃が顕れた。

180mmなんて巨大なものを人間が扱うのは不可能なため、十分の一の18mm口径になっている

ヘッドギアとリンクさせ、あらかじめ崖につけておいたマークを狙う。

(風は北から0.3メートル。これならたいした誤差はない)

弾を装填。

ガチャン、という重い音を響かせる。

ヘッドギアをずらし、180mmキャノンのスコープを直接のぞきこむ。

静かに引き金を絞る。

ドガアアンツ！という爆音を響かせ、弾丸は一直線にマークへ飛んでいき、岩肌を吹き飛ばした。

+++++

ドガアアンツ！

「ツ！？あの方向は」

今ティアナがいる崖の下から約1キロの地点に立て続けに爆発が起ころる。

スバルを待機させておいた場所だ。

（よし！計画通り）

ティアナの作戦はこうだ。

スバルを森の中に置き、魔力を垂れ流す。

それによってケーンはスバルを攻撃するだろう。

その隙に、他の三人がケーンに同時攻撃をかける、というものだ。

つまりは、陽動と奇襲である。

そして今。

その第一段階のスバルの陽動が成功した。

ティアナは、岩影から飛び出し、クロスミラージュを構える。

しかし。

ドガアアンツ！

真上で爆発が起こる。

上を向くと、爆発の衝撃で崩れた岩石が落ちて来ていた。

「チイ！」

舌打ちをしながらも、正確に岩石に弾丸を撃ち込んでいく。

全ての岩石を退けた。

（……………なんとか大丈夫ね。なんでこの場所がばれたか分からないけど、もらったッ！）

しかし、ケーンの狙いは、岩を落とす事ではなかった。

低い地鳴りが聞こえて、ティアナは立ち止まる。

（なに？トンネルでも掘ってるっていうの？）

地鳴りは止むことはなく、さらに大きくなる。

（だんだん大きく………？これは………水の音？）

ゴゴゴゴゴという腹に響くような地鳴りの中に、滝のような激しい水音がする。

（まさかッ！？）

ティアナが上を向くと同時に、

巨大な水塊が襲ってきた。

+++++

「湖の決壊を確認。水流による敵勢力の排除を完了」

再び装着されたヘッドギアには、地形が詳しくしるされている。

そこには、あらかじめ仕掛けられた爆発物の場所が印されており、崖の上の印が、丸からバツに変わっている。

彼の狙いは、まず、派手なロケットランチャーを使い、北から南へ真っ直ぐに流れる川向こうの崖の側へ追い込むことだ。

追い込んだのちに、崖の上を爆破。

湖を決壊させ、一気に敵を潰す。

「これで終わ

」でやアアアッ！！」

真後ろからエリオの奇襲。

キャラの魔法で強化されたストラダは鋼鉄をも切り裂く。

すでにフリードは水を被り、炎を使えない。

となると、この突撃が最後の切り札だ。

50メートル近い丘を僅かな時間で駆け上がる。

あと数メートル。

と、ケーンは懷から何かを取り出す。

それはリモコンだった。

手の平サイズのリモコンには、何個かのボタンと小さいアンテナ。

その内の一つを押す。

爆発音とともに、ケーンの直ぐ後ろの地面が数十メートルにわたり、崩落する。

突撃してきたエリオシかり、キャロシかり、フリードシかり。

ケーンが立ち上がる。

振り返り、足元を見ると、僅か数十センチ先まで崩れ、崖になっていた。

まるで塔のようにそびえる丘だったものの上から大地を睥睨する。

やがて、警戒をとき、

「……………終わりだな。状況終了。今日の訓練はここまで。各自、訓練内容をレポートにまとめ、提出するように」

第二回、『困ったときのインザジャングル』初級編が終わった。

4・0『バトル・イン・ザ・フォレスト』（後書き）

戦闘描写はやはり難しい

でも頑張ります

リクエストは引き続き募集しております

月光花をききながら

5・0『シークレット・トーク』（前書き）

スランプ

文が変

だげどつなおせばいいかわからん

5・0『シークレット・トーク』

カタカタカタカタ……………

時刻はすでに11時をまわった

時々コーヒをすすりながら、フォワード陣から提出された書類に目を通す。

司令塔、ということもあってかティアナの書類は他のメンバーより量が多い。

スバルの三倍はある。

「……………だるいな。」

ピリリ

ピッ

「どぢぢらぢらっ？」

『僕だよ。ケーン』

「ああ、クロノか」

こうしてこの二人が通信するのは久しぶりである。

『まあ、ついこの前まで同じ事件もあったし、ずっと一緒にいたからね。あまり久しぶりっていう感じはしないかな?』

そう。

ついこの前まで二人は同じ事件を担当、……どころか、クロノの補佐官をしていたのだ。

通信する必要すらないほど近場にいたのだ。

「どうした? 緊急な任務か?」

顔を曇らせるケーン。

めんどくさい以外では表現のしようがないような表情だった。

『いや……………』

『十年ぶりの彼女達はとうだった? 八神 圭治』

今度は別な意味で顔を曇らせた。

ケーンはふと、両手を組む。

両方ともに偽物の腕。

それを見つめる両目も義眼だ。

「『達』じゃねーよ。はやて以外本局に行ってんじゃねーか」

がらりと雰囲気が変わる。

数多の戦場を闊歩した熟練の雰囲気はなく、反抗期の青年のような荒々しい喋り方になる。

『それはすまなかった。今回の出張は完全なイレギュラーだったんだよ。……………それで？』

しつこく聞いてくるクロノ。

それにうざったるそうに顔を渋らせる。

「見事に仕事バカだな。疲れが溜まりまくりだろうが」

『兄としては心配か？八神　はやての兄、八神　圭治としては』

「そんなわけあるか。仮にもあいつは部隊長だ。自分の体調ぐらい管理できるだろう。シャマルもいることだしな」

興味なさそうに椅子の背もたれに体重をかけながらそう応える。

微かに目を細めて、息をはきだす。

「エイミイはどうだ？元気か？俺が死んだ時に相当ショックを受けてたらしいけど」

彼が急に話しを変えたことに、眉をひそめる。

実際のところ、エイミイは八神　圭治が生きていることを知らないのだが。

『元気だよ。今は子育て任せつきりだけだね。そろそろ家族サービスをしないと命が危ないよ』

ハハハ、と思い出し笑いをするクロノ。

流石にこれ以上話を引っ張るのは悪いと思ったようだ。

『で？はやてのことは気にならないのかい？』

「……………心配に決まってるだろ」

するとクロノは満足そうに頷き。

『そうか。よかったじゃないか。頑張ったかいがあった』

「仕事終わって呼び出されて、『六課行ってきたね。』って軽く言われて振り回されてる俺がそんなに面白いか？つか、理由が意味不明だよ。『思うところ』ってなんだよ」

『まあ、そこら辺は結構適当に書いたからね』

終始笑いをこぼす。

すると、口調を一変させる。

『奴らの情報があった』

「……………ほう。どこだ」

『場所は一年中、雪に覆われている、無人世界だ。そこで、兵器の開発と、試験運転を行ってるらしい。近日中に任務を要請する』

「『カーズ』は？」

『使用が確認されている』

「任務了解。後日、事態にあたる」
通信を切る。

深く息を吸って、吐き出す。

「んじゃ飯食いに行『ガシャン』なにやってんのよエリオくんづい
ちやだめスバルしゃべるな!」……………」

クローゼットから、変な声が聞こえた。

ゆっくりと、開く。

「お前等、何をしてる」

そこには、予想通りというか、フォワード陣の四人がいた。

「いつたい、何を、やって、いたんだ？」

「い、いえ、何もしてませんよ？通信を聞いてたりなんかしてませんよ！？全然！」

「バカスバル！」

「あー！」

.....
.....。

「はあ~~~~~。ばれたならしかたないか。」

そういつて語り出す。

自分が十年前に失踪した八神 はやての兄だと。

ずっとクロノやリンディと一緒にいたが、クロノのせいで無理矢理、機動六課に出向させられたと。

ずっと神妙にその話を聞いていたスバルは手を挙げ、

「……………部隊長はこのことを？」

「知らない。言わないでくれよ？後、なのはとフェイトにも」

気まずい空気が流れる。

「……………今度メシおごってやるから」

「了解しました！！！」

「スバル……………」

「エリオくん……………」

呆れというか、哀れみというか。

凄く残念な視線を二人に送っていた。

「個人的にはケーンさんの口調のほうが気になりますけど」

ティアナが聞く。

「こつちが地なんだけど、クロノがなんか厳しそうな感じで行け、とか言うからさ。」

「ああ、……………そうですか」

何故かがっかりするティアナ。

後で聞いた話したが、二重人格とか双子とかそついうおもしろいものを想像していたらしい。

真相はいつもたわいもない事である。

+++++

「てかなんで俺の部屋にいんの？」

「えっと、まずぼくが、ケーンさんの歓迎会をしようって言い出して」

「どうせなら部屋を直接改造してサプライズパーティーにしようってなってる」

「わたしたちが用意しようとしたらケーンさんがきてしまって」

「私はバカスバルにタツクルをくらってクローゼットに叩き込まれました」

三人が思案顔で呟き、一人がいらついた表情ではきすてる。

呆氣にとられるケーン。

内心、『こいつらは真正正銘のバカなのでは？』とか失礼なことを考えてたり考えてなかったり。

ふと、彼はクローゼットの中を覗く。

すると、彼が固まる。

覗いたまま。

半分開いた扉に手をかけながら。

空気が、死んだ。

だが、すぐに笑顔になり、

「そっかぁ、それはしょうがないなぁ」

と言った。

その時、四人は見た。

彼の後ろに黒い影が……………

いつかのなのような、黒く、深い、地獄のような暗闇。

「ひっ!?!」

約一名、悲鳴をあげたとびすさった。

「それで、どうして俺のゲームが壊れてんの？」

四人が後ろを振り向くと、そこには液晶画面にひびがはいったゲームが置かれていた。

「実はこれ、世界に百台しかない限定モデルでさ」

暗闇から角が生える。

悪魔のような真っ黒な一角。

「テント禁止、飲食禁止、座り込み禁止のところ、四日も店にらんで買ったんだあ。トイレにも風呂にも行けず、ご飯を食べることもできず、寝ることもできなかったんだよなあ。あれは辛かったなあ」

暗闇から魔王がその姿を……………

「あ、あの、ケーンさあーん……………?」

「死亡フラグだ」

後日のヴァイスさん

なんかいきなり、隊舎が爆発したんだよ。

それで行ってみたら、新しく来たっていう奴が涙目で屋上のほうに行ってみたいでさ。

部屋を覗いたらティアナ達が寝てたんだよ。

何してたんだろうな？

第二章 1・0『ワンス・デイリー・ライフ』（前書き）

A n o t h e r C e n t u r y ' s E p i s o d e R

扱いづらい

今までのシステムの方がやりやすかった

でもモンスターは良い

第二章 1・0『ワンス・デイリー・ライフ』

朝。

眩しい朝日が差し込む部屋で、ベッドに寝っころがる一人の青年がいた。

ケーン・エイトである。

半袖短パンという、彼なりの一番楽なスタイルで、天井を眺めていた。

実は、彼は十年前に死亡したとされていた八神はやての実の兄なのだ。

誰にもバレないように口調を変えた。

外見のことはどうでもよかった。

十年もたてば小学生でも社会人になる。

それほど彼の身体は成熟していた。

身長はそこそこ。

昔と同じで細身だが、上着を脱げば、その引き締まり、程よく筋肉のついた理想の肉体が表れるだろう。

両腕の二の腕にぐるりと回る傷痕がある。ズボンを脱げば、太ももの付け根にも同じような傷痕がある。十年前に彼は身体の一部を失った。

両手両足、両目、内蔵の一部。

その失った箇所のほとんどを機械で補っている。

腕だって強く握れば硬い人工筋肉に触れるし、瞳もよく見ればカメラのようにフォーカス合わせのように動く。

いつもは総髪にしている男にしては長い茶髪も、今はほどかれ、無造作に広がっていた。

彼は八神はやての兄だという真実を隠している。

理由は多岐に別れているが、最も大きな要因は、自分自身の状況の変化からきている。

彼はクロノや、リンディの協力の下、リハビリと訓練を兼ねてロストロギアを回収していた。

その過程であつた数々の出来事。

時空管理局の裏の顔を中心とした人体実験。

ようするに知りすぎたのだ。

瓶詰の赤ん坊をはじめとして、山積みになされた頭から足を生やしたり、腕が三本あったりする奇妙な形をした死体の山。

人間同士の動物じみた共食い等。

それらの情報は知られてはならないものばかり。

いつ刺客がきて襲われるかわからない。

実際襲われたこともある。

故に、自分に家族がいることをさとられてはならないのだ。

巻き込んでしまうから。

大切であれば、大切であるほど。

+++++

コンコン

「ケーンさん。朝ですよー。起きてくださあーい」

エリオの声がする。

この前の『フォワード陣上司プライベートフロア侵入事件』の後。

ケーンとエリオ、ヴァイスとグリフィス、それにザフィーラの五人とは、数少ない男性陣ということもあり、既に親友という呼べるような関係になっていた。「早くしないとヴィヴィオにまたおじちゃんって言われちゃいますよ?」

「今起きる。それに何度も言ってるが俺は二十歳だ!」

+++++

食堂は、かなりの人にうめつくされていた。

しかし、壁際の席だけは違う。

そこには誰もいなかった。

誰もそこに座ろうとはしない。

その空間だけ、違う空気を作っている。

とにかく、全てが木でできていた。

黒っぽい渋い横座りのテーブル。

かなり背の高い椅子。

テーブルの向こうには棚があり、たくさんのボトルが並んでいた。

………もつとストレートに表現するなら、『バー』が一番適切であろう。

グリフィスとヴァイスが座る。

するとどうだろうか。

二人に熱烈な視線を送る局員がいる。

しかも、複数人。

その全員が女性局員である。

あまり遊ばず、仕事も真面目なグリフィス。

新人の局員には優しい指導をするなど、『なのはやヴィータと正反対だ。この人は聖人か』とも言われており、女性受けが非常に良い。

かたやヴァイスは、軽い、遊び人、ナンパ男など言われているが、（その殆どが根も葉も無い噂で、本人は硬派である）女性への細やかな気遣いができる人物だし、雑誌に出れば、数多の女性を虜にするであろう肉体美を兼ね備えている。

はつきり言えば、双方とも方向はちがえど、かなりのイケメンだということだ。

「マスター遅いな」

「また寝坊じゃないんですか？……あ、来ました」

二人の視線が出入口へと向けられる。

+++++

「エリオ。あまりはしゃぐな。皆の前では強面として通ってるんだ。騒ぐと軽く見られるぞ」

「だってケーンさんの料理っておいしいんですもん！これが楽しみ

で毎日早起してるんです！」

「美味しく食べてもらうことは結構だが、スバルには言ってないだろうな？あいつの耳に入ってしまったたらそれこそ終りだ」

エリオもそうだが、スバルの食事の量はハンパではない。

しかも、ケーンの素性を知っている。

財布、自分の現在の立場の二つを失うことになる。

金銭に関しては結構余裕があるが、立場は一度失うと取り戻すのに時間がかかる。

「大丈夫ですよ。あれ以来、ケーンさんに嫌われてると思ってますから」

「……………俺はそこまで子供ではないが」

+++++

「ヘーイ！マスター！朝メシ早くしてくれ。腹減って死にそうだ」

「ヴァイスさん。少し落ち着いたらどうですか？」

ちなみに、『マスター』とはケーンのあだ名だ。

このハードボイルドな空間を作るため、棚やらテーブルやらを準備したのは、全部ケーンが用意し、棚の中のボトルはヴァイスがザフィーラと一緒に選んだものだ。

ザフィーラは意外と酒に詳しいのだ。

「戦場ではそういう物も必要だからな」と言っていた。

そういう経緯やこのメンバーの中で料理ができるのがケーンだけ、ということもあり、ケーンのことを皆は『マスター』と呼ぶのだ。

+++++

朝食のホットサンドを食べ、食後のコーヒーを啜っていた。

ヴァイスはブラック、グリフィスはミルクを少し、エリオはカプチーノを飲んでいた。

で、このミニバーのマスターはというと、

「意外だなマスターってそんなの飲むのか」

「僕はブラックだと思いました」

「ケーンさんって甘党なんですか？」

砂糖たっぷりの激甘カフェオレを飲んでいた。

「……………別にいいだろ」

「いや、まあいいんだけどさ。意外だったつつつか」

「なんでブラック飲まないんですか？マスターのブラックはミッドでもNo.1だと思いますよ？」

グリフィスはコーヒーマニアである。

ミッドにある喫茶店やカフェについて記事を書かせたら右にでる者はいないという。

そのグリフィスに絶賛されるのだから、腕は超一流と言えるだろう。

「リンディさんが甘党つてのもあったがな。昔クロノに飲まされた時に……………」

「なにがあっただんですか？」

「……………リバースしかけた」

……………。

「余計な事言つてすみませんでした!」

+++++

本日の訓練も終了し、フワード陣はシャワーを浴びていた。

「ねえティア」

「ん」

「最近ケーンさんとエリオって仲いいよね」

「ん」

「なんでかな?」

「ん」

「……………ティア？」

「……………ZZZ」

立ちながら寝ていた。

「ちょッ！ティア！？」

「んあ！？あれ？なんだっけ？」

「どうしたの？最近かなり眠そうじゃない？」

すると、ティアナは顎に手をあて、

「なんか最近疲れが溜まってるというか、身体がだるいのよね」

「あ、わたしもです。疲れがいつきにきた、みたいな感じで。エリオくんは早起きしてるんですけどわたしはちよつと……………」
「キャロも最近違和感を感じるようだ。」

「スバルはどうなの？身体だるかったりしないの？」

「うゝん。この前メンテしたばかりだし、あまりないかな」

「いや、そういうことじゃ、……………ま、いつか。わざわざ気にしてもしようがないか。私はもうでるけど、二人も早めに上がりなさいよ」

そう言って、ティアナはシャワー室を出た。

「…………でも、さ」

「はい？」

スバルが静かにつむぐ。

「……………どこかで会った事がある気がするんだよね？」

「ケーンさんですか？」

キャロは首を傾げる。

「うん。いつかは分からないけど」

その時、スバルは気付く。

自分の頬が、シャワー以外の液体で濡れてる事を。

+++++

「今日のミーティングはこれで終わりだが……………お前達、疲れが溜まってるように見えるが、大丈夫か？」

シャワーを済ませ、会議室でミーティングをしてる時、唐突にケーンは言い出した。

「そういえば最近キャラは朝遅いよね」
エリオも既に気付いてたらしい。

「いえ、何故か最近身体がだるいというか……………体調が優れなくて」
すると、ケーンは新しい玩具を見つけたかのように、少しだけ瞳にワクワクと表現するのが一番適切な感情を表した。

「そうか、それなら俺が、……………」
少し止まり、

「いや、……………やっぱりいい。忘れてくれ……………」
といった。

スバル、ティアナ、キャラの三人は、ケーンの行動に首を傾げる。

「え？しないんですか？」

唯一エリオはなんのことか、分かるらしい。

（エリオくん知ってるんだ。ケーンさんと仲いいな………わたしとは最近あまり話さないし………）

キヤロがひそかに落ち込むが誰一人気づかない。

「いや、前にも言っただろ。昔の二の舞にはなりたくない」

「聞いてみなければ始まらないじゃないですか！」

するとエリオは振り返り、

「スバルさんどうですか？」

と聞いた。

「ん？いいよ」

即答した。

「だから、何をするの？」

「それはですね………」

「」「それは？」「」

「マッサージです！……！」

三人ともポカンと口を開けてる。

「誰が？」

「ケーンさんが」

「誰に？」

「スバルさんに」

「なにをするの？」

「マッサージを」

……。

「誰が？」

「ケーンさんが」

「誰に？」

「スバルさんに」

「なにをするの？」

「マッサージを」

.....。

「誰が？」

「——もしかしてそれはツッコミ待ちなのか？」

+++++

結局。

マッサージはまた今度となった。

がしかし、最近は一リオがよくやってくれと言い始めた。

しばらくして、『エリオ、ケーン、Boys Love疑惑』が巻き起こったが、それは別の話。

第二章 1・0『ワンス・デیلیー・ライフ』（後書き）

.....くだぐだですね

仮面ライダーWが終わりましたね

自分的には、平成ライダーの中でも上位ランクに食い込みました

ここで一つ批評を

クウガ〓神

アギト〓ストーリー良し。しかしオチが微妙。ギルスは俺の永遠のヒーロー。

龍騎〓子供には難解。しかし、悪くはない。龍騎の必殺技がメツチヤカツコイイ

555〓ブラスターフォームの蹴りがカツコイイ。劇場版が大好き

剣〓なかなかの名作だが、オチが納得出来なかった。劇場版で、解消したが、そっちでのカリスの出演を増やしてほしかった。

響鬼〓必殺技が蹴りじゃないんで見てないです。友人いわく、『人

生』らしいので、今度見ます。

電王Ⅱコメディー色強し。フォームについて若干ムカついたが、オチも良く名作。おもしろい

カブトⅡ紛れも無い名作。臭い演技もあったが、全体的なストーリーが良く、必殺技もカッコイイ。オチも綺麗。しかし、劇場版は別作品として見たほうがいいかも。

キバⅡ必殺技微妙。バイク微妙。フォーム最悪。主人公より、親父の話のほうが良いとは何事か。オチは悪くない。その分むなし。デイクイドⅡクウガ復活！オダギリさんバンザイ！と思ったら別な人。これも悪くないけど、結末が劇場版は無い。必要あるか？

WⅡ園崎が終わって、『ボス終わったじゃん！』と思ってたら思わぬところに伏兵が！オチもすっきり。久しぶりの名作。しかし、蹴りの時に割れるのだけは勘弁してほしい。

こんな感じでしょうか（笑）

長々とすいません（謝）

実は今、ストーリーに悩んでいます（泣）

タイムスリップしようか、現代にしようか……

出来ればアンケートを。

参考にしたいとおもいます。

しかし、ビビッ！と来て、これだと思ったらアンケートは無視する
かもしれません（汗）

ってことで一つよろしくお願いします

ではこの辺で。

『人は独りだからこそ。誰かを、愛せるんだアアアアアッ！』

2・0『スペシャル・ミッション』（前書き）

昨日エンドレス　ワルツを見てたせいで寝たのが03：00（汗）

メツチャ眠い

ストーリーの一応の方向は決まりつつあります

Fortressに関してですが、これはほとんど私の独自解釈です
かなり原作と違うでしょうが、どうか目をつぶっていただきたいです

2・0『スペシャル・ミッション』

その日も、平和な日々が続いていた。

いつものように、模擬戦で四人を罠にかけ、今日は泥沼に落としたところだった。

「ゼエゼエ……ゼエゼエ……つ、疲れた」

「あ、あんたはまだ、いいわ、よ。私達、なんか、泥だらけ、なんだから」

「……………」

「エリオくんが白目むいてる!？」

+++++

ケーンは既にシャワーを浴び、自室で書類を見ていた。

画面を開いてるのではなく、紙の書類だ。

机に投げ出されている封筒には、でかでかと『マル秘』の文字が踊

っている。

資料には、ある物体のCGフレームが描かれていた。

見た目は変則的な騎士の鎧のように見える。

色は着いてないが、フィギュアのように間接のある人間が装着しているのは、槍と盾、特長的な胸の装甲、スカートのようなパーツ。

そして、書類の最後に書いてある、

『Fortress』の文字

+++++

地上本部。

そのロビーに、一人の人物がいた。

長い栗色の髪をサイドで結んでいる。

その憂いげな瞳は、さつきからずっと空中をゆっくり泳いでいた。

「なのはー」

突然、声上がる。

すると、どこかへ意識を飛ばしていた高町　なのはが覚醒する。

「フェイトちゃん！」

そこに振り返った先にいたのは、金髪のロングヘアの女性。

フェイト・テストロッサ・ハラウン執務官だ。

「やっと終わったよ。早く六課に帰ろう」

「うん行こう」

そうして二人は歩きだす。

駐車場に停めてあるスポーツタイプの車に乗り込み、走り出した。

高速に乗った頃フェイトがずっと気になっていたことを尋ねる。

「そういえば、例の企画。通ったんだって？」

「うん。でも通ったには通ったけど、課題が大き過ぎるよ。得にサイズがね」

思わず苦笑いをするのは。

「下手すると十年ぐらいはかかるかな？」

これにはフェイトも苦笑い。

「流石『要塞』の名前を持つ装備は伊達じゃないか」

しばらくして、ある建物の前にたどり着く。

懐かしの自分達の家。

古代遺物管理部 機動六課隊舎である。

「さあ、それじゃはやてちゃんの所に『ピーッ・ピーッ・ピーッ・ピーッ・ピーッ！』え、これってッ！」

緊急出動を知らせるサイレンが鳴り響いた。

+++++

「――以上や。ほな三十分後にヘリポートに集合すること。解散!」

緊急ミーティングが終わり、ケーンは自室への道程を足早に移動していた。

ズボンの後ろのポケットから携帯端末を取り出し、あるファイルを開いた。

【情報部より、管理外無人世界にて、テロ組織の本拠地を発見。古代遺物管理部 機動六課にテロリストメンバーの逮捕、及び質量兵器、ロストログアの確保を要請する。】

他にも、出勤経路や、敵戦力、脱出に関してなど事細かにしるされていた。

『ケーンさん!今の警報って』

通信がくる。

「ティアナ。フォワード陣全員に繋げ。」

『全員ここにいます』

画面には、フォワード陣の四人が映っていた。

「特務だ」

全員が息を飲む。

特務とは、文字通り普段より、さらに危険度が高く、かつ緊急性を要する任務のことだ。

J・S事件の時もこの特務が各方面に発令されている。

「今回の任務はテロリストの逮捕と質量兵器、ロストログアの確保だ。テロ組織カフカは新型兵器の開発と実験をやっている。その過程で十六の世界を滅ぼし、六十八の世界がいまだ戦火に包まれている。」

「そんなに、たくさん……………」

キャロが悲しい顔で呟く。

「既に別の隊が動いている。俺達は別ルートで侵入、兵器の確保を行う。しかし、そう上手くはいかないようだ」

ケーンが苦い顔をする。

「え？」

「ヒューマン・ガジェットが確認されている」

「ヒューマン……………ガジェット……………ですか？」

スバルが首を傾げる。

「人型ガジェットの総称だ。メインセンサーとしてシングルカメラを採用していて、全身がグリーンカラーで統一されている。」

「……………ロボット？」

エリオが問う。

「一番その表現がしつかり来るだろう。装備は多伎にわたるが、マシンガン、ガトリングキャノン、ロケットランチャーが殆どだ。正直、数で押し切られたら魔導師を相手するよりキツイ」

「対処法は無いんですか？」

「シールドは装備しているが、A・M・Fは無い。力づくで倒せるだろう」

「ロストログアについては？」

先と同様にティアナが尋ねる。

そんな言葉にケーンは一息おき、

「奴らが使っているロストログアは『カーズ』という。カード型の

ロストログアで、その中には、巨大質量兵器の設計図がしるされている」

「きよだいつて、サイズはどれくらいなんですか？」

「約五十メートル前後だ」「そんな奴、どうすれば………」

「カーズはデータベースであると同時にエネルギーリアクター、つまりエンジンの役割を持っている。機動される前に取り押さえる。他に質問は？」

それに皆は無言で答える。

「いいだろう。今すぐ全員装備を整え、ヘリポートに集合しろ」

「……了解！」「……」

+++++

「はやてちゃん！」

緊急ミーティングの後、急いで部隊長室に戻ろうとした八神 はやてに、声がかけられた。

「なのはちゃん！フェイトちゃん！二人とも帰ってきたんか？」

「いま着いたところだよ。はやて、今のアラートって何？」

そこで、今回の任務の概要を二人に話した。

「そんな！？フォワード陣だけで格納庫を制圧しろって言うの！？」

「せやけど、敵の戦力が予想以上に多いらしくて、本隊でも正面を抑えるのが精一杯らしいんよ」

すると、なのははさらに焦り出し、

「それならせめて私達もフォワード陣の方に「それはアカン」え！？」

その提案にすぐに待ったをかける。

「なのはちゃんやフェイトちゃんは管理局の中でも超有名人や。二人は正面に行つて、『エースがここにいます。ならここを固めればいい』って相手に思い込ませる事ができる」

「……………象徴としてほしいってこと？」

フェイトが冷静に問う。

「せや。……………ごめんな。こんな役回りで」

しかし、フェイトは首を横に振る。

「いいよ。じゃあ私達は正面にまわるから」

「ちょっとフェイトちゃん！」となのはは文句を言うが、背中を押され、渋々歩きだす。

そんな二人を、はやては悲しげに見つめる。

なのはが言いたい事は分かっている。

フェイトは、表にこそ出さないが、エリオやキャロが心配で仕方ないはずだ。

自分だって、わざわざ自分の仲間を危険にさらしたくはない。

.....。

『はやてちゃん！早く準備するですうッ！』

「.....わかった。今いくで」

一人の局員がはやてのすぐ隣を忙しそうに走っていく。

その人物が廊下を曲がるのを見届けてから、部隊長室へと向かった。

2・0『スペシャル・ミッション』（後書き）

次から特務が始まります

お楽しみに

3・0『リターン・トゥ・?・アンド・スニーク・ミッション』（前書き）

やっとテストが終わりました

少し短め（？）ですが、よろしくお願いします

3・0『リターン・トゥ・？・アンド・スニーク・ミッション』

遠くで爆発音が聞こえる。

吹雪の突き刺さるような冷気も、眼球を焼く雪の反射で増幅された太陽光も、ここには届かない。

しかし、その音だけは、分厚い壁を何枚も通り抜けて響いていた。

今頃正面の滑走路では管理局と、雇った傭兵共が、殺り合ってるはずだ。

その中に、機動六課が加わったのを、つい先ほど確認した。

クイツ、と眼鏡のフレームを持ち上げ、真っ暗な部屋の中、キーボードに指を走らせる。

「…………正面にはあの忌まじしいエースオブエースとプロジェクトF…………ならここにガジェットを……………」

ザラッ

ふと、視界の隅にある画面にノイズが走る。

それは監視カメラの映像だった。

二、三度ブレると直ぐにおさまった。

じっと見つめると、

気付く。

天井に備え付けられているファンが回っていない。

これが回っていないと、室内の気温を一定に保てなくなってしまう。

そうになると、燃料や扉が凍結したりしてする。

しかし、それが停まっている。

その人物は、キーボードを叩き、別のウィンドウに稼動状況を表示させる。

電力は正常に供給されていた。

ニヤリと、口元を歪める。

「ドアの開閉は確認されていませんから、通気ダクトですね？ だったらD - 2にこれを……………」

もはや常人では目も霞むような速度でタイピングを完了させていく。

「うふふふ……早く……早く来て下さい……。Fの遺産……
タイプゼロセカンド……ルシエの末裔………」

その人物は目の前の機械にカードを差し込む。

ピッ、という音がして、明かりがついた。

正面には巨大な五つのモニター。

その下には半球状の360度センサー。

椅子の両側には同じ形をしたレバーが付いている。

その感触を確かめるように深く握り込む。

「そして、CODE ZERO。貴方を捕獲する。それとも私がこ
こでこういうことを考えてる事すら予測しているのかしら？フッフ
ッフッ……ハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッハッ
ハッハッハッハッハッハッ！」

そこには、ナンバーズ、No.4。

クアットロが狂喜の産声をあげていた。

+++++

「まさか、こんな所を通るなんて……」

ティアナが思わず悪態をつく。

「せ、狭い」

「エ、エリオくん。前むいちゃだめだよ？／＼／＼／」

「う、うん／＼／／」

施設全体に張り巡らされている通気ダクトの一つに、ケーン以下四名は匍匐前進していた。

幅は約50センチほど。

肩幅が大きい人ならつつかえてしまう。

ティアナ、ケーン、スバル、キャロ、エリオの順番で移動している。

時折、暖かい風がふいてきていた。

この通気ダクトは、空調設備としての使用が多いため、中は予想に反して暖かった。

しかし、正義の味方の組織の人間が、ダクトをはいずり回る。

「何と言うか………なんかこうしていると、強面とかそういう役作りがどうしてもいいような感じがしてくる」

「ティアー。後どれくらい？」

「もう出口は見えてるわよ」

その距離。

ざっと10メートル。

四人はほっとし、肩の力を抜く。

もうすぐ出られる。

ザラッ

ケーンの視界にノイズが走った。

「ストップだ」

全員に待ったをかける。

「……？どうしたんですか？」

しかし、ティアナの問いには答えない。

どこか虚空を見つめるケーン。

その瞳には、暗い通路しか写っていないはずだが。

彼の両目は義眼だ。

それも、魔法と科学のハイブリットである。

本人の魔力が枯渇しないかぎり、半永久的に活動するという代物に、リンディ・ハラオウン監修の下、更に改造を施した超一級品である。

「……………一、二分ほど、意識を失うような状態になるだろう。俺が声をかけるまで待機だ」

ティアナが思わず振り返り、後ろの三人が顔を上げる。

ヒューマンガジェット。

ピンク色に輝くモノアイをキョロキョロと移動させながら、弾をばらまいていく。

その手にあるのは、なのはですら映画でしか見たことが無いようなグレネード付きのガトリングだ。

全部で六つある砲門は絶え間無く回転を繰り返し、マズル・フラッシュを絶やす事はなかった。

[illegible]

今のところ、なんとか障壁で防いでいるが、いかんせん一発一発の威力が大きく、連続する音と共に削り取られ、薄くなっていくのが目に見えていた。

ピシリと、ひびが入る。

ドガンツ!!!

前方で爆煙が立ち込める。

ガジェットがグレネードを撃ったのだ。

「フェイトちゃんッ！」

今も、フェイトはなのはよりはるか前で戦っていた。

『だ、だいじょうぶ！でも、この人、つ、強い』

そう、前に出る、ということは敵に近づくということ。

今、彼女は現在進行形で敵の魔導師と戦っているのだ。

「一体、どうすれば……スターライトブレイカーさえ撃つ時間を稼げれば、あ！」

ガトリングが、なのはに殺到する。

ヒューマンガジェットには、魔力の大きさや、バトルスタイルを調べる事が出来るセンサーがある。

その中で最も危険、もとい、魔力が大きいがために、最重要撃破目標に設定したのだ。

全ての銃口がなのはに向けられる。

「——ぐッ！」

ビキビキと、障壁にひびが走る。

今までの攻撃で既に限界が近づきつつあった。

それでも、ここまでもったのはひとえに、レイジング・ハートのおかげだろう。

銃弾を防ぐ時、絶妙なタイミングで角度を変えているのだ。

それにより、衝撃を受け流し、ダメージを減らせていた。

しかし、あくまで気休め程度だ。

パリン——

ついに耐え切れなくなり、ガラスのようにけたたましい轟音を立て、

割れた。

3・0『リターン・トゥ・?・アンド・スニーク・ミッション』（後書き）

とある女友達の家では、マンガやアニメが一切禁止なんだそうです
なので、ゲームやDVD等を引き取ってほしいとのことで、薄桜鬼
をいただきました

……………おもろいのかな

4・0『サンドロック・エンドレスワルツ』（前書き）

だんだん短くなってく……………

ヤベー（＾－＾；

あいもかわらず、そこには、薄暗いダクトがあった。

「あの、ケーン、さん…？」

エリオが控えめな声をかける。

「大丈夫だ」

短く言うと、エリオは黙り込んだ。

「ケーンさん。早く行きましょう」

もぞもぞと前方で動いていたティアナが焦り気味に言った。

施設の正面では、管理局員が戦っている。

今も傷付いてる人がいるかもしれない。それがもし、自分の知る人物なら、と。

悪い思いだけが、頭をよぎる。

一刻も早く目的地に到達して、この戦いを終わらせねばいけない。

「そうだな。なら、お前達は早く行け」

そう言って、ケーンは脇道にそれる。

「は？、え！？ケーンさんは！？」

「少し用事ができた」

ケーンは止まる事なく、後ろ手に手をふりながら言った。

だんだんと小さくなり、やがて、曲がり角に消える。

「どうしたんでしょうか？」

「んんん、トイレかな？」

「その解答がでるあたり流石としか言いようがないわ」

はっ、とティアナはため息をつく。

そして一行は、残りの十数メートルを移動していく。

+++++

「ここか」

角を曲がってすぐにあるフタ。

そつとスリットから中を覗き込むが、何かがいるような気配は無い。

ポケットからナイフを取り出し、隙間に差し込む。

それからゆつくりとナイフを動かしていき、フタを完全に外した。

顔だけをそこから出し、周りを見渡す。

そこはかなり広い体育館のような場所。

サッカースタジアム程のフロア。

体育館、と言っても木製ではなく、全方位がコンクリートに覆われている。

方向転換し、足から落ちる。

20メートルほど落下し、足裏のバーニアで落下速度を殺し、着地した。

それと同時に、明かりがつく。

冷たい氷を連想させる水銀灯。

その冷たい光りさえも届かない場所から、微かな駆動音。

それはだんだんと大きくなり、やがて耳をつんざく轟音へと変わる。

そこには、

大量のヒューマンガジェットがいた。

バーニアをふかせて、床スレスレを低空飛行する。

真っ直ぐケーンに、正確にはケーンの更に向こう側にある扉にむかってだ。

その先にあるのはD - 2地区。

格納庫だ。

「全く……少しは外せよな」

両腕を肩に持つて行き、腰を落とす。

最初の一体がケーンの真正面を向かってくる。

ガジェットがケーンの存在に気付いたのか。

高度を上げて避けようとする。

すれ違う直前。

ケーンの体がぶれて、

ガジェットが地面に墜ちた。

腹から十文字に切り裂かれ、四つに分かれる。

そのまましばらく滑って壁にぶちあたり、赤い炎を上げた。

ヒューマンガジェットは一斉にバーニアを停止させ、地面に着地する。

大量のモノアイにケーンの姿が映る。

いや、あれはケンなのだろうか。

青い、鱗のような装飾が付いた全身を覆う装甲。

緑色のデュアルアイが付いた兜。

そして手には双振りの剣。

その剣はとても奇怪な形をしている。

根元から大きく弧を描く大剣。

東アフリカに伝わる両刃剣。

ショーターだ。

「『サンドロック・エンドレスワルツ』。フルアーマーは初めてだが、なかなかハイスペックな機体だな。お互い試運転がまだだろう。手伝ってやる」

ヒューマンガジェットが一斉に腰にマウントしていたヒートホークを抜く。

「Rock・n・roll Baby・・・」

そして、大量の鉄屑が宙を舞う。

4・0『サンドロック・エンドレスワルツ』（後書き）

はい、短かったですね！

ごめんなさい、今新しい小説の構想で忙しいのです。

そちらは近々upします。

私が書いてるオリジナル小説の方ですが、支離滅裂なストーリーを修正しようとして更に支離滅裂になっていくので、削除したいと思っています。

オリジナルはまた今度ということで（笑）

では、またあいましょう。

さよなら、サヨナラ、サヨナラー。

5・0『サイコ・アクティブ』（前書き）

久しぶりの長い話し。

頑張りました

5・0『サイコ・アクティブ』

十秒。

来るはずの衝撃が来ない。

二十秒。

まだ来ない。

ゆつくりと、目を開いた。

「大丈夫ですか？なのはさん。生きてますかい？」

そこには三人の人物がいた。

三人とも、管理局で支給される杖型アームドデバイスを持ち、シールドを張り続けている。

いずれも、この一月の間になのはが教導をしていた教え子達だった。

「み、みんな！どうして？」

「何言ってますか。俺達はなのはさんのおかげでここに立ててる

「んですよい？」

「まあ、あれだけ散々、防御系統ばっかやってたら当たり前だけだね」

「最終日に卒業テストだ！とか言ってスターライトブレイカーを撃たれた時は真面目に死ぬかと思いましたけど、ちゃんと耐えられたし。防御だけならエース級ですよ」

思わずなのはは顔を伏せる。

そこにどんな表情が浮かんでいるかは三人からは見えない。

しかし、それも直ぐに分かった。

それは満面の笑み。

なのはは嬉しかったのだ。

ホテル・アグスタの後にあったティアナとの一件もあり、『自分の教えは本当に正しいのだろうか』という疑念を拭いきれずにいたのだ。

『なのはさんのおかげ』。

少なくともここにいる三人の役に立てたのだと。

教育者としてこれほど嬉しいも無いだろう。

「ありがとう……………行こうみんな！」

「「はい!!」「」」

そして四人は戦場を突き進む。

+++++

「ふん!!」

ガシャン！

おもいつきり金網を蹴り飛ばし、フォワード陣はやっとの思いで、格納庫にたどり着いた。

「……………ねえ、ティア。あんまり聞きたくは無いけど……………あれ何？」

広々とした格納庫には、たいしたものは置いていなかった。

ヒューマンガジェットの大群？

大量のプラスチック爆弾？

否。

そこにあつたのは黒い塊。
ただただのつぺりと広がる黒い壁だった。

「……………まさか、これが?!」
その巨大な壁こそが、探していたモノ。

「大きすぎる……………!」
「そんな……………」

ロストロギア、カーズの巨大質量兵器。

「とにかく!こいつを起動される前にロストロギアを確保しないと。
皆で手分けして」

「あ…………ら。もう手遅れですよ…………」
「

不意に、声が響いた。

そして、四人はその声に聞き覚えがあった。

「この声、まさか！」

「で、でも今は管理局に捕まって投獄中のはずですよ?!」

ありえない。

そう誰しもが思った。

しかし、現実はそう甘くない。

「ナンバーズ、No.4。クアットロちゃんですよ〜。お久しぶりねえ、機動六課！」

それと共に地響きが鳴り響く。

だんだんと黒い壁が迫ってくる。

それは呆然とするフォワード陣の脇を堂々と通り、シャッターの前までたどり着いた。

「さあ~~~~、大きな大きな花火をうちあげるわよ~~~~」

四人の視界を黄色の光りが満たした。

+++++

なのはは教え子の三人と協力し、五体目のヒューマンガジェットを破壊した時。

格納庫のシャッターが真っ赤に染まり、爆発した。

周りの雪が蒸発し、ごつごつとした黒い岩肌が剥き出しになる。

その一撃でヒューマンガジェットが粉碎。

敵側の魔導師が全員戦闘不能。

こちらにも前線いた魔導師の半分は巻き込まれたと思われる。

爆煙と水蒸気のせいで、格納庫周辺は全く見えない。

だが、高町なのはは感じる。

その壁の向こうに、膨大な量の魔力が集束されるのを。

直ぐさま念話を広域に飛ばす。

「全員、防御しながら撤退を！」

——しかし、誰ひとりとして返事を返す者はいなかった。

「え、なんで？」

そして、無情にも光りが放たれた。

無数の黄色い閃光が煙りと吹雪を貫く。

巨大な砲撃ではない。

一つ一つがデイベインバスターほどの太さのビームが何発も撃ち出された。

さながら、砲撃のショットガンだ。

空に向かって放たれたそれは、空中を飛びながら戦っていた空戦魔導師達に直撃する。

慌てて障壁を張ったようだが、それも二秒ともない。

高射砲という武器がある。

大空を飛び回る戦闘機に向けて弾を打ち出す物だが、あれは狙うものではなく、弾膜をはる物だ。

飛ぶ隙間を無くして撃墜するのだ。

それと同じ。

数えるのも馬鹿馬鹿しくなるくらいの圧倒的な数で空を覆い尽くした。

（おかしい……………）

そんな中、なのはは違和感を拭いきれずにいた。

（たった一発のデイベインバスターが当たったからって防御をすぐ抜けるわけがない。ましてや今飛んでるのは本局の航空師団。あきらかに打たれ弱すぎる）

いつの間にか砲撃が止んでいた。

その場にいる全員が原形を留めていないシャッターの方を見る。

その時、首謀者と思われる人物の声が聞こえた。

「はあ~~~~い、時空管理局のみなさあ~~~~ん。ナンバーズ、N
O・4のお~~~~。クアットロちゃんが来ましたよあ~~~~」

+++++

ガン！

クラウドディアの艦長席のすぐ後ろでもいつきり壁を蹴るはやて。

「なんでや！なんでクアットロがいるん！？クロノ君！今は拘置所
にいるはずやろ！」

艦長席に座るクロノは手元のモニターを見ながら言う。

「……………今確認したが、確かにクアットロは今現在も拘置所にいる。今は寝てるそうだが」

「ざぁんねえん。そこに入ってるのは確かに私だけど、今はこの私がクアットロで……す」

その言葉に更に困惑するはやて。

「つまり、クローンっていうことなんか？」

「ん……おいしいですね……。確かにこの身体はクローン、造られたものですけど、中に機械を詰め込んでない、生身の身体で……す」

うふふふふ、と、心底可笑しそうに笑う。

「つまりはパソコンと同じ。身体を二つ用意して、記憶を電子変換してこちらの身体に送ったんです。ですから、身体は生きてるけど、精神がないので脳死状態みたいになってるんですよ……」

「な!?!」

まだ続いていたJ・S事件。

スカリエッティは逮捕され、完全に終わったと思っていたのに。

まだ――。

「『生身』ということは、ISはないのか？」

クロノが問う。

「ええ、ありません」

あつさりと答えるが、でも、と続ける。

「私にはこれがありますので~~~~~。わざわざシルバーカーテ
ンを使って隠れる必要がありませんので。ではみなさん。せいぜい
頑張って逃げてくださいね~~~~」

最後まで軽い態度を変えなかった。

ということは向こうには、絶対的な自信があるということ。

（その油断が命取りだ！）

「グリフィス！船のコントロールを任せる！バード2はこれより出
撃する！」

すぐ下にいたグリフィスが階段を駆け上がり、艦長席に座る。

「え、クロノ、なにを？」

突然のことに戸惑うはやて。

それを無視して、廊下の奥へと走り去る。

「なんなんや……………」

そして艦長席に座ったグリフィスはと言うと。

「戦場にいる全ての管理局員へ。今すぐその場から退避を。なお、退避の際は飛行魔法は許可しません」

とんでもないことを言い出した。

「な、何言つとるんか！？そないなことを勝手に！」

クロノのような艦長クラスでない者に部隊を指揮する権限はない。

有り体に言えば、馬鹿な事を言ってるのだ。

「勝手ではありません。この時に限り、三提督に戦場指揮の全権を貰っています」

「そな、アホな」

『アホではないぞ。八神はやて』

不意に、通信が繋がる。

その姿にはやては見覚えがあった。

「ラルゴ・キール元帥！」

武装隊榮譽元帥　ラルゴ・キール。

伝説の三提督の内の一人だ。

「これは緊急事態である。全ての局員はクラウディア、及びバード
3グリフィス・ロウランの命令を遵守せよ！……………ではバード
3。後は頼んだぞ？」

それだけ言うと直ぐに通信を切ってしまった。

「ま、マジなんか？」

「現時刻をもって、この艦は独立行動をとる。」

せわしなくキーボードの上を動く指。

「前方、約三。。。メートル先に敵機を確認。リアクター、戦闘出力へ。推進機関解放、……………イグニッション。全武装のリミッター、安全装置解除。対EC兵器の稼働率、80%。システムオールグリーン。ハッチ解放、フラップ最大、ドラグフィンアウト」

テキパキを指示を飛ばし、戦闘準備をする。

いつもの大人しい感じはかけらも無く、そこには歴戦の勇士のような勇ましい表情のグリフィスがいた。

「一番ハッチ、オープン。パイロットの搭乗を確認。システム稼働、モードミリタリー」

周囲に表れる大小あわせて三十を超えるモニターに目を配り、全てのメーターをチェックしていく。

「パワーの上昇を確認。ミリタリーまで3、2、1、完了。システムオールグリーン。タイミングをパイロットに譲渡」

通信士の女性がインカムに向けて叫ぶ。

それと共に全てのオペレーターの手が停まる。

そして、その目は、正面の巨大なモニターに向けられる。

「え!?!」

そこには奇妙な形をしたヘルメットを被った人物がいた。

『了解、I have control』

クロノだ。

頭にV字のアンテナが付いた武士の兜のようなヘルメットとバリアジャケットを装備している。

『クロノ・ハラオウン!デンドロビウム、出る!』

ジャアアアと火花を散らしながら、クロノがモニターから消える。

直後に、前方に白い影が飛び去った。

5・0『サイコ・アクティブ』（後書き）

クロノのバトルはもう少しあとなかな？

次はケーンががんばる予定です

6・0『シュート・キーワード』（前書き）

久しぶりでござる

かなり難産でござった

テストやら、修学旅行やら、バンド合戦やらで時間がありませんでした

これからもちよくちよくとよろしくお願いします

6・0『シュート・キーワード』

6・0

「ムラマサ、ブラスタアアアッ！」

エネルギーを白い大剣に集束させる。

即座に十数メートルにも及ぶ巨大な刃を形成し、横薙ぎに振るう。

桃色の閃光が暗闇の中を駆け抜け、遅れて爆発が起きる。

既に、サンドロック・エンドレスワルツは使い物にならなくなった。

ショーターは根本からへし折られ、頭部横に着いたガトリングの弾も切れた。

即座に武装を破棄し、別の装備に換装する。

今まで変えた武装は、50を超える。

地面には、さらに大量の残骸が散らばっており、足の踏み場など存在しない。

倒した数が1000機を超えた辺りで、ずっと空中戦をしていた。

今装備している機体はX3。

背中にあるX状に伸びたスラスタードクロマークが特徴の機体だ。

「ハアアアアッ！」

ムラマサ・ブレードの両側に櫛状の刃を出し、ヒューマンガジェットを切り刻む。

二体切り裂いた後、腰だめに構えての刺突。

三体を一気に串刺しにし、壁に貼付けた。

（チツ、流石に数が多過ぎるぞ！）

離れた所に控えていたヒューマンガジェットがガトリングの雨を降らせる。

「くッ、エフィールド！」

左腕に菱形のシールドを張る。

上半身は守れたが、足には何発が入ってしまった。

「っのヤロオオオッ！」

スラスターを一点に集め、一気に加速する。

近づいてから一度開き、その場で体を90度回転させる。

目の前のヒューマンガジェットのものアイがこちらを向くが、もう遅い。

再度、スラスターを集束させながら、ムラマサ・ブレードを真横に向ける。

ドンッ！という空気の爆発する音とともに、ヒューマンガジェットが宙を舞う。

超高速の斬撃は、斬られることなく、その圧倒的な風圧でヒューマンガジェットの胴体でひきちぎった。

「ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…ゼエ…」

どつと疲れが襲ってきた。

地面に膝を着き、ヘルメットを投げ捨てた。

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

次の編隊が来るまでの短い休み。

足を瓦礫の上に足を投げだし、完全に座った。

装甲の隙間から、小さなビンを取り出し、中身をあおる。

『ザザーン……ザザザザ…ケーザザザ…ザザるか？ザザザザ』

念話ではなく、電子機器を介した通信機でもあるヘルメットをかぶりなおし、周波数を合わせて、音をクリアにする。

「こちらケーンだ。どうぞ」

『EC兵器を確認した。全員下がらせて今はデンドロビウムで相手をしている。こっちに来れるか？』

ケーンはちらっとだけ廊下の方を見る。

「少し辛いな。証拠を抑えるためにもデカイのは撃てないし。接近戦用の武器じゃないと」

『残しておく必要は無い。大々的に宣戦布告してきたからな』

「了解。早々に潰させてもらう」

ケーンは通信を切ると、いつの間にか持っていたゴツイ銃を廊下に向ける。

その奥からは機械の低い駆動音。

「グレネード」

拳大の砲弾が白煙を引いて突き進む。

着弾を確認せず、スラスターを全開にしてその場をあとにする。

後ろでくぐもった爆発音がした。

角を二、三回曲がり、格納庫に出る。

（ああ、こいつか）

そこには、ロストロギア『カーズ』に記されていた質量兵器。

サイコがそこにあつた。

「……………そうか。でも、クロノの敵じゃあないな」

床に着地する。

「試作二号機」

ケーンの体が発光する。

「それじゃ、言われた仕事をきっちりこなすか」

数瞬後。

そこにあつたのは巨大過ぎる両肩のスラスターとシールド。

そのシールドに手を突っ込み、バズーカのような砲を取り出す。

「セーフティー解除コード。『無数の英霊の命が無駄死にはなかつた事の証のために。』」

右肩にある、砲台に連結させる。

「『再び理想を掲げるため。』」

砲身の奥から光がもれだす。

「『星の屑、成就のため。』」

それは徐々に輝きを増して、

「シュートキーワード。『ソロモンよ——』」

放たれる。

「『私は帰ってきたアツ!』」

6・0『シュート・キーワード』（後書き）

お次は、クロノ君のMA戦です

ドカドカやっちやいます（笑）

SS1・0『改造人間の休日』（前書き）

なんだかんだで思いつきの作品です

この長さの話しを作るのにどんだけかかってるんだよ、って感じですよ

SS1・0『改造人間の休日』

さて、皆さんは俺の体がほぼ機械だということを知っているだろうか。

昔、ちょっとしたいざござがあつて、俺は体がぐっちゃぐちゃになり、義手義足義眼にペースメーカーという四重苦なのだ。

よって、定期的に病院に行き、検査をしなければならない

それをサボった場合、最悪機能停止してしまうからめんどくさいが、サボれない。

というわけで、今回はそんな感じのお話。

+++++

年も開け、正月休暇も過ぎ去り、訓練すらも、やりたくなくなるような肌寒さの中。

俺は病院への道をひたすらえっちらおっちら歩いていた。

こんな寒い季節には、こたつに入って、ぬくぬくとしたいものだが、そうは問屋が下ろさない。

この体はいわゆる特別製で、定期的な検査が必要だ。まあ、そうでもなきゃ、今頃、こたつでゲーム三昧だろうけど。

ここから少し先にある角を曲がると、行きつけの病院が見えてくる。

正直勘弁してほしい異名。

『赤服のケーン』の由来になった場所だ。

実際は、採血中に地震が起きて、なみなみと俺の血液が入った注射器が割れて、血を頭から被っただけなのだが。

とんとん。

優しく、誰かが腰辺りを叩いた。

振り向くと、そこには、眼帯をしたちっこい幼女がいた。

「……………今失礼な事を考えなかったか？」いや、なんにも。

白くて長い髪から、怒りからなのか、湯気を立たせる少女。

「なんか用か？」

「少し、道を聞きたいんだ」

すると、目の前の少女はメモを取り出し、てそれを読んだ。

「く、くろつ、くろうちえ、くる、……………この近くに病院はあるか」

ちなみに、正しくは、クロウツェル総合病院だ。

創設者の名前からとったと思われるその病院は、行けばたいいの病は何とかなる、とも言われている。

ここに無いのは、産婦人科と泌尿器科ぐらいなもんだ。

「知ってるし、これから行く。一緒に行くか？」

すると、少し驚いたように眼を開いて、

「ああ、たのむ」

とだけ言った。

道を曲がり、ただひたすら、会話も無く歩きつづけた。

なんか話した方がいいのか？

いや、何を話せばいいんだ？

それとも少女に質問でもすればいいのか？

結局その沈黙に耐え兼ね、取り合えず顔を向けた。

「……………」

バツチリと眼が合ってしまった。

そのまま、何事も無かったかのように首を前に戻す。

ヤベーよヤベーよ。

バツチリ瞳と瞳が正面衝突起こしたよ。

ゼツター変な奴だと思われた。

「？どうかしたか？」

「いや、なんでもない」

「そうか……」

会話短ツ！

やはり普段からみんなと会話しておいた方がいいのか………

「くつくつくつ」

すると、後ろから抑えた笑い声が聞こえた。

涙目になりながら口元に手を当て、笑っている。

「君は本当におもしろいな。姉は愉快だぞ」

もう、どうにでもなれ。

+++++

「どうだい？最近の調子は？」

メガネをかけた老医師が言う。

「君の体は普通の戦闘機人よりじゃじゃ馬だから？ちよつとした違和感でも動作不良に陥るかもしれないんだよ？何か気になることはないのかい？」

「いや、特には」

クロウツェル総合病院の地下八階。

戦闘機人、及び俺専用の検査室がある。

分かりやすく言うのなら横置きを生体ポッドだろうか。

ベッドの周りを透明なケースが覆い、赤や緑のレーザーが体を撫でていく。

ピッピッ、と一定の時間で電子音になる。

数秒後、ケースが開き、俺はゆっくりと起き上がった。

「うちには戦闘機人の患者さんが三人いてね？他で治療を受けるよりはいくらかましかもしれないがね？なかなか君の体は繊細だからね？注意するんだよ？何かあったら連絡を超越すんだよ？」

「分かってます。緊急時にはよろしくお願いします」

服を着て、一礼してから部屋を出る。

お手製のブラックコーヒーを転送して、ロビーへと続く階段を昇った。

+++++

ここの検査室にエレベーターはない。

他の一般の患者が来るのを防ぐためだ。

なんだかんだ言いつつ、世間的に戦闘機人というのは、ひとつき以上たった今でも、忌まわしき存在であることには変わりはない。

その戦闘機人の患者がいる病院ともなれば、最悪、一般市民から攻撃を受ける可能性がある。

予算を使うわけにもいかないから、この設備も殆ど伝説の三提督からの出資らしい。

「ゼー…ゼー……、この階段は長すぎる」

エレベーターが無い、ということは階段しかないわけなのだが、設備がしっかりしている分、目的地がかなり遠い。

普通のビルという所のだいたい八階分ほど昇って、やっと関係者以外立入禁止の書いてある看板が見えてくる。

そのすぐ後ろの戸を開けると、ロビーに出る。

さて、どうしようか。

時間がかかると思っていたので、まるまる一日休みを取ったのだが、昼前に終わっちまった。

これから、どうするか……………。

とんとん。

この感じ。

前に同じようなことが、——いや、今日あったか。

「……………む」

振り向けば、やはり、そこには朝のよ、…少女がいた。

軽く睨んできた。

地味に怖え。「どうしたら？金が足りなかったのか？」

「い、いや、そういうわけではない」

少し、どもりながら言う。

もしかや図星だったか？

「仕方ないな。いくらだ？」

「だから違うと言っているだろ！」

「そうか、ところで林檎とオレンジどっちがいい？」

「え？りんごが…、ってちょっと待て！なんで自販機に向かおうとする！」

「グレープもあるよ」

「子供あつかいするなあ—————！！」

真っ赤になって叫ぶ少女。

さて困った。

さっきから周囲の視線が痛いぞ。

取り合えず連れ出すとしよう。

俺は少女の腕を掴んだ。

「んな！な、何をするつもりだ！」

人聞きの悪い事を言うな。

少し周りを見てみる。

「周りって………あ」

林檎のように真っ赤になって俯く少女。

一度手を離し、腕ではなく手の平を包み込む。

ゆっくり手をひいて歩くき、そのままロビーを出た。

+++++

その場から逃げるように立ち去った俺達は近くにあったファミレスに入った。

店員にすすめられるがままに四人掛けのテーブル席に向かい合わせですわる。

「まあこれも何かの縁だ。昼メシぐらいおこるよ」

「す、すまない。」

あ~~~~話しが続かない~~~~

「あの、」

ん？

「名前を聞いてもいいか？」

「おう、俺はケーン・エイトだ」

偽名使うのはやっぱり嫌だな。

かといって本名を出すわけにもいかないし。

「私はチンクだ」

「よろしく、チンク」

そう言って右手を出す。

チンクはそれを不思議そうに眺めた。

「握手だよ、握手」

「そ、そうか」

戸惑いながらも、俺の手を握り返した。

随分と小さい手だ。

しかし、病院に行ったとうことは何かしらの病を抱えてるといつとだ。

でも別にやつれてるわけでもなく、肌の色もハリも良い。

……なんで病院に行っただんだ？

「そっぴや、病院探してたみたいだったけど、どこが悪いのか？」

すると、チンクは、

「そ、それは……ッ！」

そこにあるは驚愕。

何かしらの強力なゆらぎ。

何かをこらえるように自分の手を握り合わせた。

瞳の端には、キラリと光るものが――、つて！

「わ、わるい。聞いちゃいけない事だったか？」

「いや、なんでもない……グスッ」

いやいやいや、泣きながら言われても説得力ねえよ。

まさか、不治の病とかか？

それとも家族が危篤状態？

俺が考えてもしかたのない事ではあるけども――

「…………話したくないならそれでもいいけど」

やっぱり、初対面の俺になんか話すのは嫌だよな。

「何か悩んだりしてるなら相談してくれ。」

そう言ってテーブルにゆっくりと名刺を置いた。

我が儘かも知れない。

こんなの単なるエゴだ。

何も出来ないかもしれない。

でも、目の前で泣いてる人を放っておけるほど無感情でもない。

「俺はこれでも管理局員だ。別に局員は正義の味方だ、なんて言う

つもりは無いけど、相談してくれるなら聞くし、そのために協力してほしいならしてやれる。」

それに、と続ける。

「普通、連絡先とかは端末の赤外線とかでちよいちよいつてやればすぐに交換できる。でも俺は名刺を使ってる。何で分かるか？」
チンクは俯きながらも、小さく顔を左右に振る。

だろうな。当たり前だが。

「『この名刺は俺が表裏なく接する事ができる奴にしか渡さない』。ナンパみたいに聞こえるかもしれないが、俺はチンクを気に入った。だから渡した」

あ~~~~~………はずい。

多分顔は真っ赤なんじゃないだろうか。

「だから、その、えつとだな」

くそ。

言葉が出てこない。

オールバックの長髪をガシガシと掻く。

その時、ふと考えた。

真っ赤になった男と泣いてる幼女。

はたから見たら訳の分からない構図だな。

ゴスンッ！

「ぐおわッ！」

頭に激痛がはしった。

「また、変なことかんがえていたな」

ジト目で睨むチンク。

手元にはナイフとフォークが。

普通にあぶねえッ！

「い、いや！？考えてにやあすよッ！？」

「噛んでる」

な、なんですと！？

いかん、落ちつかなければ。

こういう時は、人を飲み込むんだ！

いや違え！

えっと、あっと、その、

「くつくつくつくつくつく、ふっはっはっはっはっ！」

突然チンクが大爆笑した。

それはもう、店の中にいる人達全員が振り向くほどに。

「チ、チンク？」

「ふっふっふっ、すまない。少しツボに入って、くふっ」

えー……。

+++++

それから、昼食を食べ終わるまで、チンクはずっと思い出し笑いをしていた。

他の店に行ってる間も、ずっと笑っていた。

クレープを喰いたときは流石にたしなめたが。

ちなみに、俺にはどこがツボったのかさっぱりわからない。

「それじゃ、そろそろ解散か？」

時計を見るまでもない。

すでに太陽は水平線の向こうに沈んでいる。

「そつだな……………」

こちらも随分沈んでいる。

別れを悲しんでくれるのは純粹に嬉しいが。

「おいおい、そんな顔してんじゃねえよ。暇な時があったら連絡してくれば会いに来るぞ？」

俺はチンクの頭に手を乗せて、優しく撫でる。

「だって俺達。もう友達だろ？」

ぴくっ、とチンクが動く。

ゆっくりと俺を見上げ、顔を戻し、水平線上の月を見上げた。

「…………子供あつかいするな」

SS1・0『改造人間の休日』（後書き）

ナンバーズの釈放っていつからでしたっけ（汗）

スバルやギンガも定期検診してたはずですし、他の戦闘機人の方達もやっていたはず……ですよね？

本編でも出番はあまり望めないのでSSという形で出させていただきました

てかナンバーズの皆の特長とかを覚えきれないの、他のメンバーの出番は今の所なしです

希望があれば、頑張って覚えましょう！

では次の話で会いましょう！

7・0『アルティメット・トゥ・ショートカット』（前書き）

夜中に投稿するのはもう止めよう

眠くてしにそうだ〜

7・0『アルティメット・トゥ・ショートカット』

最初は復讐するつもりだった。

監視の目をかい潜り、精神データの転送を行うのは至難の技だったが、それでも、成功したのはまさに僥倖と言えるだろう。

脱獄したことに気づかれていないから、あまり隠れる必要もなかった。

無人世界に研究所兼自宅を作ってから、ドクターの遺伝子を体にもっといえば子宮に埋め込んだ。

人造魔導師の製造を阻止するために生体ポッドの流通は厳しく監視されているので、使えるのは己の体のみだった。

遺伝子操作によって、成長を早めた子供が生まれるのには、一週間もかからなかった。

エネミーと名付けたその女の子は、二ヶ月もすれば、10歳ぐらいになる。

それから行動を起こせばいい。

たった二ヶ月が大変だった。

育児の本などを読みあさり、世話をした。

それはすごく面倒なことだった。

でも、不思議と嫌じゃなかった。

我が子の拳動のひとつひとつが愛おしかった。

数ヶ月後。

肉体年齢は満10歳を迎えた。

その日は拙いながらも、料理を振る舞った。

焦げてたり、形が崩れていたりしたが、それでもエネミーは、「おいしいおいしい」と食べてくれた。

涙が溢れてきた。

それを見たエネミーは、「ママ、いたいの？いたいのいたいのとんでけ〜」と言った。

嬉しかった。

復讐なんてどうでもいい。

この子と一緒に暮らせればと――

そんな時、管理局が現れた。

調査員だったのだろう。

三人の男だった。

特に障害はないだろうと思って放っておいた。

今ではあの時の自分を絞め殺したい。

家に帰った時、中が荒らされてた。

すぐに家中を探した。

そして見つけた。

エネミーの部屋。

ちぎれたぬいぐるみの首が廊下に転がっている。

ドアを開いた。

そこには、裸の三人の男と、感情を殺したエネミーの瞳。

気づけば、三人の男はぐちゃぐちゃの肉塊になって転がっていた。

すぐにエネミーを、ロストログア、カーズの設計図で作った要塞に連れていった。

家に戻って死体の処理をしようとした。

戻ると、デバイスが定期的に発光していた。

救難信号。

エネミーをあんな目にあわせといて、救難信号。

その全てがサイコに殺到する。

「ああああああアアアアアアアアアアアッ！」

こちらも絶叫。

胸部から放たれた極太の拡散ビームは、ミサイルを落としていく。

しかし、全てを落とすにはまだ足りない。

「左腕シールド、エフィールド、展開！」

使える防御手段を全て使い、バーニアを全開でふかし、左右に小刻みに動き、必死に回避する。

エフィールドは、エネルギーを拡散させる装置なので、物理的な、剣やミサイルは防御できないはず。

しかし、元のエネルギーは魔力。

ゆえに、バリア系防御魔法のように、受け止めるぐらいの強度はある。

「（まだ足りないッ？）くっ、A・M・F：！」

サイコの両方の二の腕辺りの空間が波打つ。

それはだんだんと大きくなり、約50メートルもの巨体を包み込んだ。

A・M・F・は、元々ガジェット・ドローンに積まれていた。

後付けされた武装なのだろう。

A・M・F・。

Anti Magi-link Field（アンチ マギリンク フィールド）は、魔力結合を解き、魔法を無力化するものだ。

しかし、魔力製フィールドとは違い、かけらも防御能力は無い。

ならば、何故今使うのだろうか。

「クソッ！」

結果はすぐに出る。

A・M・F・から発生した揺らめくフィールドに侵入したミサイルが次々と落下していった。

ミサイルはクロノの魔力をデンドロビウムに送り、武器コンテナの中でミサイルに変換される事により、生成される。

A・M・F・は、ミサイルで推進力と残されていた魔力を消失させたのだ。

それにより飛べなくなったミサイルは重力に引かれて落ちていく。

クロノは即座にバーニアを蒸かし、サイコの頭上を通り、背後にまわる。

「小蠅がちよろちよろと！墜ちろオオオッ！」

クアットロはサイコを反転させ、右手の砲門をデンドロビウムに向ける。

ガギユッ！

異音が響きわたった。

（ッ！腕がまわりきらない！？）

キーボードを操作し、カメラを向けると、細いなにかが右腕に絡み付き、その動きを妨げているのが見える。

「これは、いったい……？」

その疑問は、

「着っ火アアッ！」

右腕と共に吹き飛んだ。

爆導索。

爆薬を仕込んだワイヤーだ。

それを、頭上を通り過ぎた時に射出し、巻き付かせたのだ。

「グッ、このオオオッ！」

即座に拡散ビームを撃つが、それをクロノはヒラリとかわし、右腕付近にあるメガ・ビーム砲を撃つ。

「エフィールドッ！」

メガ・ビーム砲は打ち消される。

それと同時に、武器コンテナからボックスを一つ吐き出す。

巨大なミサイルが三つ束ねられた、大型集束ミサイルだ。

「喰らええッ！」

それぞれが分離し、別方向からサイコを狙う。

「まだまだアッ！」

全身の至るところにある小型ビーム砲を乱射する。

三つ全てを迎撃する。

猛烈な爆風により、戦場を覆い隠す。

「やり過ぎたか？爆煙で全然見えないな」

もくもくと地上を蹂躪する煙をクロノは上空から眺める。

「あれでやられてくれれば楽なのだな」

ギョーンッ！

煙の中から伸びたビームが武器コンテナのど真ん中を貫く。

「そうはいかないかッ！」

デンドロビウムを分離させる。

数秒遅れて爆発するデンドロビウム。

腰についたブースター兼デンドロビウムとの接続アタッチメントのステイメンを起動させた。

続いて、バリアジャケットの裾から一枚のカードを取り出す。

「さあ、新星S2Uのお披露目だ。頼むぞ、S2U」

レディ？

「『Ultimate To Shortcut』セットアップ！」

セットアップ

瞬間的に手元に広がる光り。

刹那、S2Uが起動した。

否。

U2Sがそのベールを引きちぎる。

+++++

U2S。

Ultimate To Shortcut。

順番を真逆にしただけの名前だが、そこに、クロノの意思があった。

『いつも、僕は遅すぎる。プレシア・テストロッサ事件の時、もつと早く地球に行ったら、フェイトを悲しませることなく解決できたかもしれない。闇の書事件の時はギリギリ間に合ったが、J・S事件の時も、次元航行艦があと少し間に合わなければと思うと……』

いつも、ケーンに話していた。

単に一番近くに居たからだが。

『“こんなはずじゃないこと”だと割り切るのは簡単だ。でも、割り切りたくない。過去の事を繰り返したくない』

自分の奥底にある感情。

劣等、焦燥、羨望。

様々な感情が複雑怪奇に絡み合う。

『現実的じゃないことはよく分かってる。僕も管理局の人間だからね。でも、だからこそ』

そうして生まれたのは一つの決意――。

『”皆を護りたい”。』

今まで大勢のために少数を犠牲にしてきたからこそ。

その正反対を。

これからは、全ての命を護りたい。

だからこそ、《究極への近道》を走り抜く事に決めた。

自分の追い求める、究極の理想のために。

+++++

煙が晴れて、クアットロが最初に見たものは水色の輝きだった。

水色の輝きがクロノを包み込んでいる。

ステイメンをも飲み込み、自らの一部と化していく。

そこに現れたのは、白銀の杖。

純白のバリアジャケット。

コートがなくなり、細くも力強い肢体があらわになった。

「さっそく大技いくぞ！ステインガーブレイド！」

空一杯に広がる水色の光り。

それは刃だったか。

数にして、いや、もはや数えることなど意味を持たない。

数百を超えるであろう刃の全てが、地面を指差す。

「エクスキューションシフトッ！」

煙りを、大気を切り裂いて地面を穿っていく。

「A・M・F・！」

大型集束ミサイルによって、肘から先を失った左腕を突き出す。

二の腕の空間が波打ち、フィールドを発生させる。

が、しかし。

「うおおおおおおおおおおおッ！」

「な、そんな……ッ！」

貫く。

左腕を。

肩を。

脚を。

胴体を。

胸を。

頭を。

「……………」ごめんなさい、エネミー」

そしてコクピットを。

崩れ落ちる機体を一度だけ愁いげな瞳で眺めて、艦への帰路についた。

クロノがその場を離れて数分後。

猛烈な閃光が辺りを覆い尽くした。

核という名の光りが空に、大地に。

そして、人々の記憶に大きな爪痕を残したのだった

7・0『アルティメット・トゥ・ショートカット』（後書き）

Ultimate To Shortcut

2をトゥーと読んで出来た単語です

ちなみに最初、クロノは早々に撤退する予定でした

数々の作家さんがおっしゃっていた『キャラの独り歩き』が!?

SS2・0『改造人間の白い日』（前書き）

地震のせいで、数日遅れての投稿になります。

駄文ですが、ケーン及び作者のダメっぷりを笑ってください（笑）

SS2・0『改造人間の白い日』

サンタクロースをいつまで信じていたか。

たわいもない世間話にもならないくらいのどうでもいいような話だが、実際に質問されても、正直な所、結構こまる。

何故なら、俺は元々、プレゼントを貰う側ではなく、あげる側だったからだ。

年があまり変わらない妹がいた俺は、クリスマスや誕生日の時に、お祝いのケーキを作ってやることぐらいしかしてやれることが無く、そう大層なものをプレゼントした覚えも無いが、とにかく、俺はサンタクロースの存在を気にかける余裕が無かったということだけは、しっかり認識してほしい。

結論を言ってしまうと、数年前にクロノの所の子供達がクリスマスプレゼントの話をしていたのを聞いて初めてその存在を知ったのだが……………。

まあ、それは、置いといて。

つまりだ。

俺は贈るのにはなれているが、逆に贈られるのには慣れていない。

だから、いざ貰うと、どうしたらいいか分からない。

+++++

「それで？なんでこんな時間に呼出したんだ？——ふあゝあ」

ドデカイ欠伸をしながらヴァイスが言う。

今はもう消灯時間を遙かに過ぎた午前二時。

相当遅いが、俺にとっては何気に重要なことなので、わざわざ集まってもらった次第である。

「ヴァイス。今日は何日だ？」

「何日って……、そりゃ三月十三日、いや、もう十四か。それが？」

うん。

分かってたよ。

でも出来れば何なのか気付いて欲しかったな。

「まさか、マスター………お返しを用意してないんですか？」

だつてしょうがないじゃない。

今まで貰ったことなんて無いんだもん。

「エリオはどうだ？」

「えっと、一応明日いっしょに街にでかけて、その時に渡そうかと」
臉をコスリながらエリオが言う。

そっぴや、コイツはキャロから本命を貰ったんだっけ？

この前廊下ですれ違った時には、恋敵を見るようなドロドロとした
昼ドラ的視線を投げ掛けられたが、どうしたのだろうか。

「なんの話だよ、マスタぁ。教えてくれよう」

………なんかシスコンが五月蠅いな。

「いや、そりゃひでえんじゃないの？こんな時間に呼び出されたの
に………」

まあ、バカはほっとこう。

さて、………どうしよう？

「何個もらったんですか？」

「一つだ」

街でばったり会ってから何回か交流はしてるのだが、一月前に小包が贈られてきて、開けたら案の定ってな。

エリオなんか？、8個もらってるんだがな。

俺は無愛想な上、皆から嫌われてるし。

あれ？目が霞んで前が見えないよ？

「俺といっしょだなあ〜、この前ラグナがさあ〜、」はい、お兄ちゃん！』ってさあ」

はいはい、ちよつと黙れシスコン陸曹。

「ん〜、ケーンさんって料理できます？」

「人並みには」

「じゃあ、クッキーを焼いたらどうですか？バレンタインデーのお返しにはクッキーが定番だってフェイトさんが言っていましたよ」

クッキーか…

「ケーキじゃだめなのか？」

「駄目ということは無いでしょうけど。なんでですか？」

「クッキーは作ったこと無いんだよ。ケーキなら何度かあるから、失敗作を大量生産するよりはマシだろう？」

「まあ、そうですね」

エリ才はなかなか建設的な意見言っな。

正直助かる。

「やっぱりプレゼントと言ったら花束だろ花束。ひざまづいて指輪をはめてあげるのもありだな」

「友人にそんな事をするのか？お前は」

「もちろんラグナにだよ」

もう喋るな。

まったく。

なんでこんな奴と知り合いになっただんだか……………。

「道に迷ったお前さんを案内したんだろぅが。」

嗚呼。

タイムマシンがあればあの時の自分にブレンバスターをかけてやるのに。

「……………そこまで言われると流石に傷つくぜ」

馬鹿は放っておこう。

「……………もうあれでいいんじゃないですか？リボンで体を縛って、『俺をもらってくれ』ってやつで」

「グリフィス（さん）！？」「」

グリフィスが壊れた！

「だいたい、夜中に呼び出しておいて、こんなこつを相談するなんてだるいんですよ。寝かせてください」

あの、グリフィス、くん？

「そんなもの、たいていは度胸とかそんなものです。どんな物がいいかなんてどうでもいいんです。好きな人から贈られたら嬉しいのは当たり前でしょう」

す、好きな人……………？

「少なくともチョコをくれるくらいなんだから、嫌いなわけではないでしょう？ 良い物にこしたことはありませんが、それよりもっと考えるべきものがあるでしょう」

「それは、いつたい……………？」

グリフィスは半眼で俺を見つめて言う。

「それは……………」

「……………それは？」「」

「『愛』ですッッッ！……………！……………！……………！……………」

「……………よし、それじゃいつ渡すかな。なんかアドバイスないか？
エリオ」

「……………そうですね。まず呼び出す場所ですが、――
――」

「ゆくゆくは、ラグナと一緒に風呂に入って……、一緒に寝
て……」

「愛とは、その昔に西宮川壁貴千代丸教若という死神が――
（中略）――かつて『認めたくないものだ、若さ故の過ち
は』と言った赤い英雄がいましたが、マスターには『そんな輩、修
正してくれよう』と鉄拳を――（後略）――」

男達の談議はとどまる所を、というか、止めるタイミングを完璧に
失い、グダグダと長引き、結局その後ベッドに戻る事は無かった。

+++++

さて、と俺はケーキをラッピングし、息を整える。

なんとかケーキが完成した。

短い時間の中、必死の思いで作ったケーキは、久しぶりにしては上々といったところか。

エリオには感謝、感激、雨霰。

シスコン陸曹と愛の伝導者はいつのまにやら夢の中、という非情にカオスな状態での夜明けだった。

機動六課は本日はまる一日の休みが与えられており、女と一緒にショッピングに行ったり、レストランに行ったり、はたまた男同士でカラオケ大会だったり、その逆だったり。

皆口々に今日の予定を言い合いながら、隊舎をあとにしていた。

エリキヤロの二人は一緒にお出かけ。

ナカジマ家は親父さんに買い物をねだりに行くらしい。

ゲンヤさんに合掌しておくべきか。

隊長陣は知らん。

知らんが、予想はつく。

自ら進んで、文字通り『サービス残業』か、もしくは百合百合してるんだろうな。

で、俺はというとだ。

なんとなく気付いてると思うが、チンクとお出かけする事になっている。

ああ、一応言っておくが、俺達は恋仲でも何でもない。

……いや残念ではあるんだがな。

ともかく、そういうわけで、グリフィスやヴァイスが期待してるような事にはならないと思うぞ、多分な。

それを全て引つくるめて、さて置き。

一番の問題は、この”エリオのアドバイスにより”（ここ重要）制作されたケーン特製ケーキをどう渡すかだが――、まあ大丈夫だろう。

今日中に渡すことは確定してるんだから。

その時の雰囲気任せるかもだしな。

どちらにせよ、そう急ぐ必要はないだろう。

まずは――

チンク特製弁当を食ってからでも遅くはないだろう？

8・0『サイレント・ルナシー』（前書き）

奇跡の連続投稿

まあ、神のいたずらとも思ってください（笑）

8・0『サイレント・ルナシー』

「敵側ベースの破壊を確認！おそらく、バードーによる核攻撃です！」

指令室に声が響いた。

その場には、クラウディアスタッフ、フォワード陣。

それに、遅れてやってきたヴォルケンリッター達の姿も見える。

一言で言うのであれば、ア然としていた。

禁止されている質量兵器の使用はもちろんの事、モニターにうつる映像がこの世のものとは思えなかった。

「これでは、……これでは『ゆりかご』と変わらないではないかッ！」

シグナムが叫ぶ。

巨大なキノコ雲。

天まで届くのではないかと言っても過言では無いほどに大きく、黒くまがましいその姿。

直径4000メートルにも及ぶ巨大クレーター！。

白い雪と硬い氷に閉ざされていた山は跡形もなく、さらに大きく地面をえぐり、さながら溶岩の湖のようだ。

地球出身のなのは、はやては、通信師の言葉にいち早く反応していた。

「核兵器やて!？」

「そんなッ！」

かつて地球で起きた、約5500万人もの死者を出した第二次世界大戦を終わらせた兵器だ。

日本国の広島と、長崎に落とされた二つの核爆弾は、半世紀以上たった今でも現地の人々を苦しめている。

恐ろしい。

ただただ恐ろしい。

こんな、使い方によっては星一つを駄目にするような兵器を、

こんなにもあっさりと使う。

質量兵器の禁止。

管理内世界の住民なら、子供でも知ってることだ。

次元犯罪者として名前を上げられようと文句も言えない。

そんな中、一つの声上がる。

「バード3。指示をお願いします」

フェイトは自分の耳がおかしくなったのでは、と思った。

何故なら、その声は自分が息子のように育て、助け合い、ずっと一緒にいた少年のもだったからだ。

「え、エ、リオ……？」

自然と声が震える。

振り返ればそこにいるのに、まるで見えない腕で押さえ付けられているかのように、動けない。

信じたくなかったからだ。

エリオは優しい子だ。

エリオはいざという時までに前に進める強い子だ。

エリオはどんな時も諦めない勇ましい子だ。

エリオは

エリオは

エリオ

.....。

.....。

.....。

『私の』

『私のエリオがこんな犯罪者のような事をするわけがない。』

「待機です。探索終了次第、離脱します」

正面の巨大モニターには、水蒸気と煙りの塊しか見えないが、偵察用のサーチャーが何かを出していたのだろう。

「了解」

短くエリオが言う。

そう言ったきり、何も言わなくなった。

「グリフィスくん。どういうこと」

なのはが言う。

いつもの柔らかい物腰ではない。

今にもつかみ掛かりそうな雰囲気を出している。

「クアットロの質量兵器も、クロノくんが乗っているのも、バード
っていうコールサインも。私がない間に来た教導官のこともッ！」

グリフィスはなにも答えない。

相変わらず、一定の速度でキーボードを叩いている。

「グリフィスくんッ!!」

キーボードを叩いていた指が止まる。

「……………そのことに関しては、僕には言う権限がありません」

何の感情もない冷めた声が、静かに響いた。

「…………ほんなら、直接本人に聞いてみよか」

そう言うてはやては、後ろの自動ドアを振り返る。

「勢揃いか。なかなか壮観だな」

ケーンとクロノが戻ってきた。

ケーンは、ピツチリとした黒のボディースーツを着込み、下半身だけ白い装甲を付けている。

クロノは、先ほど見せた純白のバリアジャケットだ。

ぱっと見、シャツハに似ているだろうか。

違うのは、カラーリングが真っ白で、上に来ているボディースーツが長袖という事だろう。

「探索終了。バード1、帰還準備が整いました」

グリフィスが声をかける。

「それじゃ、帰るか。地上本部の八番ドックに飛ばせ」

「了解しました」

+++++

「…………さてと」

改めてそこにいる全員を眺める。

「お前等が欲しいのは説明だろ？なら俺がしてやる」

一度深呼吸をしてから、腕を持ち上げ、敬礼する。

「時空管理局本局特務一課所属。広域特殊古代遺失物管理部隊『Bird』隊長兼特別教導官、ケーン・エイトー等陸佐だ。質問は拳手でな」

そうは言ったものの、誰も手を挙げなかった。

「ね、ねえ。ティア。ケーンさんって…」

「……………特務一課。メンバー、及び任務内容の全てが特秘事項になっているチーム。でも、大きな事件が起こる時には必ず出てくるチームよ」

「確か、凱旋門事件やトロイ・ネーデルランドの乱、A・B・C・戦争でも名前があがってましたよね？」

シャルがティアナに続く。

「ジェイル・スカリエツィ事件の時も、クロノの艦隊を特務一課が護衛していたと聞いている。相当な実力者の集団なのだろう」

端で寝そべっていたザフィーラが推測を述べた。

それに対し、ケーンは、

「いや？特務一課は俺一人だぞ」

と言った。

これにもまた、驚愕がはしる。

しかし、驚愕だけではなかった。

「…………つまり、質量兵器を使ったのも、あなたの一存ということですか？」

なのはだ。

それにはやても。

「そりゃ、俺が部隊長だからな」

「ほなら、核を撃ったのもケーンさん、ってことなんか？」

「そうだ」

即答だった。

まるでクイズの早押し問題のように、次々と、そして、軽いノリで言うていく。

その態度が、さらにカンに障ったらしい。

「……………それが一体どれほどの被害をもたらすか知つとるんか？」

「よく知つてる。だが、放射能の発生は抑えてるぞ」

「そういうことやあらへん。核兵器は質量兵器の中でも、トップクラスの危険性を持つてる兵器や。それをなんの躊躇もなく撃つなんて、どうかしとるとしか思えへん」

「そうだな。確かに質量兵器の使用は禁じられているし、それを使うなんて正気のさたとは思えないだろうな。」

ケーンは一度感慨深げに頷く。

「…………だが、お前等も分かってるんだろう？いや、分かってるはずだ。」あのジェイル・スカリエツィ事件の最前線で戦っていたお前等なら嫌というほどにな」

その言葉に、一同は何も言い返さない。

否、言い返せない。

その場で力を奮っていたからこそ、あの戦いの辛さは誰よりも、ここにいるメンバーが知っている。

「Anti Magi-link Field。この武装に散々苦しめられてきたのは誰だ？その対策に、大量の時間と労力を使ったのは誰だ？そして、実践で瀕死の状態まで追い詰められたのは誰だ？」

最初は貨物列車。

エリオとキャロが転落死寸前だった。

「もつと相手を倒すことのみに集中することが出来れば危険を侵すことも無かったんじゃないか？」

次はホテル・アグスタ。

大量のガジェットを撃破しようと無茶をし、危うく仲間を落とすところだった。

「大切な人を失わずともよかったんじゃないのか？」

スバルの顔が強張る。

スバルの母、クイント・ナカジマは任務中に、戦闘機人に襲われ、そのまま帰らぬ人となった。

「それに、ロストロギア『カーズ』。あのロストロギアはA・M・F.のように魔力の拡散作用がある粒子を周囲に散布する。第二の魔力無効化兵器ってわけだ。だから、なおさら質量兵器が効果的な武器として生きてくる」

それを聞いて、なのはは本局航空師団がサイコに撃たれた時を思いだした。

（そうか。だからあの時誰にも通信ができなかったし、本局の航空師団も簡単に落とされたんだ）

「でもよ、管理局が質量兵器を進んで使うのはマズイんじゃないのか？」

ヴィータが言う。

「おいおい。だったら高町はどうなんだ？」

全員の視線がなのはに向けられる。

「対魔法無効化兵器の開発。シールドビット、ならびに移動砲台に実体剣。名前はフォートレス、だったか？」

なのはに問い掛ける。

「でも、あれは個人で扱う代物であって核兵器ほど凶悪な兵器じゃありません」

「凶悪じゃない？おいおい、馬鹿を言ってるじゃないよ。高町の砲撃をクラナガンにぶっ放したらどうなると思ってるんだ？」

「……………」

「秘密裏にだが、”ロストログア、『カーズ』に対する捜査権限の全てと質量兵器の使用”を許可されている。グリフィスが現場を仕切ったのは俺が前線に出ていたからだ」

そういえばと、シグナムが言う。

「グリフィスやクロノ提督、それに話しを聞く限りエリオもだが、何故バードにいるんだ？それぞれの立場もあるだろう」

「分かりやすく言えば、助っ人だな。どんな時も俺一人で対応することが出来ない事が、少なからずある。そんな時に前線で戦ったり、サポートを頼んでいる。そのかわり、武器と情報。それ相応の報酬は出してる」

「どうして機動六課の関係者からなんだ？」

それにもケーンはあっさりと答える。

「簡単なことだ。俺のクライアントがリンディ・ハラウンだからだよ。人材はあの人のコネだ」

「つまり、ケーンさんが機動六課に配属になったんは……」
「協力者集めのためさ。そのために機動六課に来た」

（おかしいとは思っていたんよ。

機動六課の設立理由を知ってるはずのリンディ統括官が、ジェイル・スカリエツティ事件の後に新しい人員をよこすなんて意味の無い事をする人じゃ無かったはずや。

しかし、ほかならぬリンディ統括官の頼みでもあるし、何しろ、なのはちゃんが無事にいなかったで、応じたものの、こんなからくりがあったとは全然思ってもみいひんかった）

迂闊、と。

はやては自分を叱咤する。

しかし、とはやてはここでもう一つ考える。

自分達の知ってるリンディ統括官が今回のことに加担するか、と。

明らかに法を破り、次元世界の全てを敵にまわすような事を。

+++++

「マスター。通信が入っています」

それまでディスプレイとにらめっこをしていたグリフィスが振り返る。

「繋いでくれ」

ピッ。

『やあ、ケーン君。調子はどうだい？』

そこには、白いバイザーをかけた金髪の人物がいた。

「情報提供ありがとうございます。ジード・ホルダー準将。おかげさまで早く片が付きました」

『そうか、それは良かった。………後ろの人達は初めましてだね。私は情報部長のジード・ホルダー準将だ』

そう言っただけにはにかむジード。

「あ、初めまして私は

『いや、君達のことは聞き及んでいるよ。ジェイル・スカリエッティ事件を解決した機動六課の諸君。』

はやてを制してジードが言う。

父親のような優しい声にピンと張り詰めていた空気が、幾分ほどけていった。

『今回の事件では収容されていたはずのクアットロがカーズを利用していたとの事だったね』

「はい。もう一つの体を制作し、その体に記憶等の精神データを移して活動していたものと思われます」

ふむ、と少し考え込むように漏らした。

『こちらでも少し調べておこう。では、後で資料を送ってくれ』

「了解しました」

その言葉を最後に通信を切った。

「…………さて、間が入ってしまったが、質問の続きだ。何かあるか？」

はい、と手が上がる。

「なんだ？フェイト・テストロッサ・ハラOWN執務官」

「……………貴方は敵なの？味方なの？」

「……………」

ケーンは驚いたような顔をして、押し黙る。

溢れた声が、予想以上にか細い。

「……………お兄ちゃんを、エリオを巻き込んで、貴方は何を
つもりなの？」

「……………何を、か。それは言えない」

でも、と続ける。

「今はお前等の味方だよ——」

+++++

「昔も、な……………？」

その小さい声は戦闘機人であるスバルの耳にのみ残って、
空気に溶けた。

十万ヒット御礼！『真剣若人、ダベリ場ッ！！』（前書き）

文章が壊滅状態ですが、暇つぶしにどうぞ

十万ヒット御礼！『真剣若人、ダベリ場ッ！！』

山田「つーわけでオメー等。それでもギンガナムついてんのかッ！」

ケーン「何があつたアアアッ！」

エリオ「ケーンさんが壊れた！？」

ヴァイス「いつもの事だろ」

グリフィス「そうですね」

ケーン「いや、その反応はおかしいだろ！？だってギンガナムだぞ！？ターンのお兄さんだぞ！？銀色の魂じゃなくて、ターンなXなんだぞ！？」

山田「ツツコミがやり過ぎだ。お前は小西か？あそこがメンズノンノンな眼鏡なのか？」

ヴァイス「ちよつとそれはないわー」

グリフィス「ありえませんね」

クロノ「……………ケーン。恥ずかしい」

「俺のせいなのか!？」

+++++

山田「はい。というわけで1000000ヒットの感謝を込めて、下手くそながらも座談会みたいなものをお願いします」

ケーン「敬語。気持ち悪い」

山田「そんなイジメの標語みたいなことを言われても……。こういうときぐらい敬語で喋った方がいいんでないの？」

グリフィス「もともとそんなに喋ってない、というか山田せぴあとして喋った事なんて殆どないでしょうが」

ヴァイス「そうそう。自然体が一番だろ」

山田「仕方ねえな。……………んじゃそういうわけで、ガチャガチャくっちゃべってるから、テキトーに聞き流してくれ」

+++++

ケーン「と言ってもとくに喋ることが無かったりする」

グリフィス「ヴァイスさん。何かお題をお願いします」

ヴァイス「それじゃ、妹で」

.....。

エリオ「そういえば、ケーンさんの髪型ってあまり描写されないですけど、茶髪のロン毛でオールバックなんですよね？」

ケーン「ああ。セットするのが面倒だから、とりあえず髪を縛ったのが始まりだな」

グリフィス「変えたりはしないんですか？」

ケーン「だってたるいじゃん？」

ヴァイス「あの、マ、マスター？」

ケーン「そっぴや最近どうなんだ？るきの、だっけ？」

エリオ「ルキノさんですか？そういえばこの前ルキノさんが封筒を持ってそわそわしてたのを見ましたよ？」

グリフィス「ッえ!？」

ケーン「それあれか？ラブラブなレターとかいうやつか？」

エリオ「もしくは映画のチケットとかかもしれません」

グリフィス「え、あの、その」

ケーン「で、そこんどこどうなんだ？」

ケーン、エリオ「さあ！、さあ！、さあッ！！」

グリフィス「／／／／／」

ヴァイス「ますたあゝゝ（泣）」

+++++

山田「分かつてはいたが、お前等を放置するとカオスになるな」

ザフィーラ「それなら最初からお題はお前が出せば良かったのではないか？」

山田「おお、ザフィーラ。お前いたのか」

ザフィーラ「……………最初からいた。話している描写が無かったから存在が消されていたんだ」

山田「それにしてもお題か……とくにないな」

クロノ「本当に作者か君は」

山田「おおクロノ。久しぶりだな」

クロノ「最初にちょっと喋っただろう。……だから、ある程度の方
向性を持たせたお題を出さないと、話しを繋げにくいだろう？」

山田「じゃ、今後の展開について」

エリオ「さすがにそれはまずいんじゃないんですか？」

山田「いいんだよ。『戦いの場は宇宙へ』とか『史上最強の決戦兵
器』とか、なんか気になる言葉を並べとけば釣られた読者が定期的
に見てくれるからよ」

ケーン「お前最低だなッ！」

山田「うるせーよ。キャラがしっかりしてない中途半端なオリキャ
ラめ」

ケーン「お前が書いてるんだろうがッ！」

+++++

山田「とまあ、こんな感じでヌルヌルやってみたわけだが、予想以
上に喋る内容が無いことにびっくりだな」

エリオ「魔法戦士リリカルなのは・宙を見上げる無限のワルツ・」
では、みなさんからのご意見、ご感想を随時うけつけております」

グリフィス「感想の辺りにこういう記念の話しで『こんな感じにし
ては?』という類いのリクエストを募集しています。……………馬
鹿な作者を持つと大変ですね」

クロノ「これからも作者の首筋にデュランダルを突き付けて執筆作
業を促していくので、気長に待ってやってくれ」

ザフィーラ「それでは皆、また会おう」

山田「以上、『十万ヒット御礼!』『真剣若人、ダベリ場ッ!』」
でした。バイニー!」

エ、ケ、グ、ク、ザ

「「「「バイニー……!」」」」

ヴァイス「あれ？俺の事、忘れて「――ブツンッ！――」

十万ヒット御礼！『真剣若人、ダベリ場ッ！！』（後書き）

いやー意味不明でしたね（＾－＾）；

文章力がなさすぎる山田でした

バイニー！（白石）

第三章 1・0『リバーシブル・ミーティング』（前書き）

なんか段々と変な方向に……

第三章 1・0『リバーシブル・ミーティング』

地上本部の八番ドック。

そこに、クラウディアは着艦した。

一同は、さながら通夜のような雰囲気のまま、寮へと帰っていった。

ケーンはというと、上層部へ提出する書類をまとめていた。

書類は二つ作らなければならないから、他人より更に時間がかかる。

特務一課として提出するものと、前線フォワード部隊長として出すものの二つだ。

質量兵器を使ったことをおおやけにするわけにはいかない。

事実と、虚実。

「やれやれ。いくら慣れているとはいえ、面倒な事に変わりないんだがな」

文句を言っても始まらないとばかりに、黙々と作業を続けていく。

こんこん。

と、不意にノック音が響いた。

「まあすたあー。全員揃ったぜえ」

「……………入ってくれ」

時空管理局本局特務一課所属、広域特殊古代遺失物管理部隊『Bird』。

そこに所属、…………いや、アルバイトとして入ってる者達が来た。

バード1、ケーン・エイト。

バード2、クロノ・ハラオウン。

バード3、グリフィス・ロウラン。

バード4、ヴァイス・グランセニック。

バード5、エリオ・モンディアル。

ここに、特務一課の全てのメンバーが揃った。

「それで？話しとはなんだ？圭治」

いつになく真剣な表情が硬いクロノ。

「十中八九、”あれ”のことでしょうが」

何か悟ったようなグリフィス。

「……………ケーンさん。本当にそれしかないんですか？」

今にも泣きそうな、それこそ先程の壊れそうになったフェイトのよ
うな表情をするエリオ。

「それしかない。そのために俺は存在する」

だから、と続ける。

「やるぞ。『WORLD・REFORM』を」

+++++

「ほな、ケーンさんのこれからについて話そか」

地上本部から帰り、今は機動六課部隊長室。

そこに、なのはとフェイト、ヴォルケンリッターの面々が集まっていた。

「スバルに聞いたんだが、ケーンとかっていう野郎はコツコツ練習させるんじゃないくて、模擬戦で実戦の勘を養うやり方らしい。フォーメーションが崩れた時の対処法とか、結構ためにはなってるみてえだ」

「それに、模擬戦ごとにレポートを書かせてるらしい。自分の弱点や、それを補う方法などをまとめさせて、解りやすくしているのだから」

副隊長二人が報告する。

「そか。なのはちゃんはどうや？教導するがわの意見を聞かせてくれへんか？」

「……………悪くはないと思うよ。ただ偏り過ぎかな」

顎に手を当てながらそう言った。

その表情は少し納得してないような、微妙な顔をしていた。

「教導の方には問題はないっちゅうことやな。なら、この前の質量兵器についてや。何か情報はあるか？」

ピッ、ピッ、と。

はやては手元の端末を操作して、空中にある画面を浮かべる。

それは、クロノが操縦していたデンドロビウムだった。

「ユーノ君に頼んでみたけど、あんな兵器は、どの世界にも存在しないって。あれだけの物、ロストログア指定になっけていてもおかしくはないのに」

「過去の経歴も特別に目立った所はなかったな」

なのはの報告にシグナムが追加する。

「ん……どん詰まりやな……」

全員が、腕を組んで考え込む。

しかし、少な過ぎる情報の中、予測すらつくはずがない。

「あれ？そついえば」

シャルが声を上げる。

「どうしたんや？」

「はい、その、キャラが、ケーンさんとは『知り合いなんですか？』
って言っていました」

みんなが今度は首をかしげる。

「こん中でケーンさんと知り合いだった人おる？」

シャルの一言に戸惑いが広がる。

それぞれが顔を見合わせた。

「……………主はやて」

「なんか知つとるんか？ザフィーラ？」

少し考えて、こう言った。

「ここにいる全員がケーンを知っているはずです」

ザフィーラの一言は、その場に大量の疑問符を振り撒いた。

「……?どういうことや?」

「……………今はそれしか言えません」

+++++

所変わり、とあるレストラン。

そこにエリオ以外のバード達四羽は一行に並んで座っていた。

テーブルの上にはワイングラスがあるが、何も注がれてはおらず、料理らしき物も無い。

「もうラルゴさんには話がついてる。はやてや、機動六課の面々には牽制をしておいた。後は向こうが来てくれるのを待つのみだ」

「それも時間がありません。少しも時間を無駄に使う事は避けたほうがいいでしょう」

「だな。この小休止の間に、どこまで準備を進められるかが重要になってくる」

「……ヴァイス、どうかしたのか？ 気持ち悪いぐらいまともだな。何か悪いものでも食べたのか？」

「クロノさん、そりやどういことすか？ いかにも普段から馬鹿な事やってるみたいじゃないすか」

「馬鹿な事ね……。今この瞬間にここに居る事の方が馬鹿な事なんじゃないのか？」

「そうですよ。僕は未成年なのに、こんな場所に」

「頼み事を了承した手前、ちゃんと全員連れて来ないと悪いじゃないか」

「いやいや、クロノさんのおかげですよ。俺もそろそろ、って思ってた所だったんすよ」

「……なるほど。お前等二人のコンビネーションがここまで凄いととは思わなかった」

「どうりで服装はしっかりしとけ、とか煩く言ってたんですね。ただのショッピングだと思ったら……ハア……」

「まさか、合コンだったとは」

二人は手を額に当てて、ため息をついた。

第三章 1・0『リバーシブル・ミーティング』（後書き）

宿題が終わらない（泣）

2・0『アンフィニッシュド・ジョイント・パーティー』（前書き）

一ヶ月以上ぶりです

しかし毎日百人以上の方々が見て下さっているようで、作者としては感謝感激雨霰と言ったところでしょいか

ありがとうございます

これからも誠心誠意努力して参りますので、よろしくお願いします

2・0『アンフィニッシュド・ジョイント・パーティー』

「——だから、言つてやったんだ。『うちの親父は空の局員なんだ』ってね。そしたら事務所にいた皆は異口同音にこう言ったんだよ。『なら話しは早い。この書類にサインを』、ってね」

どこかで見たことがあるようなジョークを飛ばし、女性陣を取り込んで行くヴァイス。

「はい、クロノくん。あ〜〜ん」

クロノはエイミイといちゃつき始めた。

『新婚でもあるまいし、暑苦しい』、とケーンは思つてたが言葉に出したらエイミイにバツキバキにされるので自重。

圭治の頃は仲は良かったが、ケーンとは反りが合わないらしい。

グリフィスはいない。

何故か女性陣の中に混ざっていたルキノと一緒に何処かへ消えた。

背中に疲れたオーラが見えたので、ルキノも無理矢理連れて来られ

たのдарう。

若い内は健全に、とか思ったりしてみるが、自分も二十歳だということを書いて出し、『なんか年寄りくさいなあ』と落ち込んでみたりする我等がマスター！。

そして、その隣には。

「大丈夫か？気分が悪いなら姉の膝を貸すが？」

白髪眼帯のちっちゃいお姉さん。

チンクさんがいましたとさ。

+++++

「てか、チンクって局員だったのか？」

「正式には違うが……使えばしりのようなものだ」

白いワンピースを身に纏ながらワインを飲む様は扇情的ではあるのだが、背が小さいために背徳感にかられざるをおえない。

合コンに来たのは、男四人と女五人。

バランスが悪いが、数十時間前に特別任務をやっていたからと、無理矢理納得した。

しかし、先ほどからヴァイスのマシニングトークは止まらない。

ハラオウン夫妻も止まらない。

ケーンは一つため息を出す。

「出るか？」

「え？」

首をかしげるチンク。

「ここに居ても、ヴァイスのアホ話かクロノの惚気を聞くしかないくなるぞ？」

すると少し考えて、

「……………そうだな」

とだけ言った。

+++++

「そして、かがやつく、ウルトラソウルッ!」

「「ヘイツ!」」

所変わってミッドチルダの首都クラナガン。

そのとあるカラオケ店に、機動六課前線フォワード部隊は来ていた。

意外にもティアナがノリノリで、さっきからマイクを片時も離そう
としない。

「それじゃ行くわよ、スバル!」

「うん!…せーの、」

「「私の歌を聞け——!」」

ティアナの独壇場が始まってから13曲目。

流石に部隊長達も辟易としてきてるようだ。

「…………あははゝゝ、ティアナ元気だねゝゝ（汗）」

「だがなかなか上手い。ずっと聞いていても飽きないな」

「アタシにも歌わせろッ！マイクを寄越せッ！」

と意気揚々と立ち上がる。

シグナムは騒がしいのは嫌い…かと思いきや、自らマイクを取ることは無くとも、楽しそうに皆の歌を聞いている。

「それじゃあ私もそろそろ歌おうかしら？」

「『それだけは絶対にダメッ！（ダメだッ！）』」

「ひどい！」

「シャル歌が下手やからな」

ウィンドウから顔を上げて、ズバっと一刀両断するはやて。

スバティアが歌い終わったかと思えば、いち早くヴィータがマイクを奪取し、高速で曲の番号を入力する。

「お前らが来るのを待っていたア……」

獰猛かつ荒々しいシャウトを上げて、ヴィータのオンステージが始まった。

+++++

『続けてもいいかい?』

片耳でシャウトを聞きながら、両目ともう片方の耳は手元に浮かぶ3Dウィンドウに向いている。

「ええで。それで?どんなもんや?」

はやての話し相手、ヴェロッサ・アコースは画面の中で黒い手帳を弄ぶ。

『まず、ケーン・エイトのプロフィールからかな?今送るよ』

言ったそばからメールを受信。

それを開く。

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

『所属。』

時空管理局本局特務一課所属。

広域特殊古代遺失物管理部隊『Bird』隊長。

特別戦闘技術教導官。

ケーン・エイト一等陸佐。

前隊長の昇進により、直属の部下であるケーン・エイト一等陸佐が隊長になる。

『経歴について。』

10歳で管理局入局。

634戦闘航空部隊に所属。当時の階級は三等空尉。

入局には三提督が絡んでいた模様。

ゆえに階級が最初から高い。

恐らくこの時点で既に特務一課のメンバーだったと思われる。

12歳。

連続殺人犯を逮捕したことをきっかけに、二等空尉に昇進。

辞令により、情報二課に異動になる。

トロイ・ネーデルランドの乱。

違法覚醒剤『トロイ』の密売を主としている麻薬組織『ネーデルランド』の摘発。

トロイとは、アップ系とダウン系が組み合わさったような性質を持ち、服用した時は少し元気が無いな、と思う程度だが、ちょっとした心象的きっかけにより一気にアップ系に変わり、破壊欲のリミッ

ターが外れ、気の済むまで破壊活動が続ける。

組織と同じ名前の管理外無人世界『ネーデルランド』において、ネーデルランドの本拠地と判明。

時空管理局武装隊と情報二課、特務一課の共同作戦により、鎮圧に成功する。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

「これ……！なのはちゃんのッ！」

なのはが入局して二年目。

疲労による隙をつかれて、重傷を負った事件である。

管理局員にはエースが墜ちたことや、ガジェットの出現といった方が有名だが、公式には、確かに『トロイ・ネーデルランドの乱』と記載されている。

『エースが墜ちたことにより、局員の士気は下がり、大敗をきつた……。でも、その後に単独で潜入した特務一課により鎮圧したつてのがホントの所だよ』

あの時はなのはがケガを負った事で頭がいっぱいだったが、改めて考えると特務一課の能力の高さがよくわかる。

A・M・F. によって魔法が使えない状況で、対抗策も皆無なのに、ゆづに100機を越えるガジェットを単独で破壊するなんて不可能だ。

……いや、一つだけ心当たりがある。

つまり、

「その頃から、あのありえへんレベルの質量兵器を使っていたんか
……？」

『はやて、続きを』

ヴェロッサが次を促す。

はやてはウィンドウに指を触れ、スクロールさせた。

|| || || || || || || || || ||

14歳。

A・B・C・戦争に置ける最重要攻略目標、『バロン級戦艦ダダリ
オン』を制圧した功績により、三等空佐に昇進。

A・B・C・戦争（Albatross・Birth・Cabal）
。

ある召喚獣を召喚する大規模術式を作成するためだけに、マヌエイ

ラ帝国よって引き起こされた戦争。

大陸に刻まれた超巨大な術式に大量の血液を流し込むことにより、発動される。

よって、大陸全土で何万人も虐殺された。

召喚獣は魂のような存在であり、よりしろが必要不可欠である。

そのために作られたのがバロン級戦艦ダダリオンであり、これさえ破壊すれば術式は完全停止する。

レジスタンスと、現地の管理局員、機動四課、特務一課が協力することにより、バロン級戦艦ダダリオンの破壊に成功。

術式は消滅。

首謀者であるマヌエイラ帝国バングスタン・ゴル・マヌエイラ皇帝は次元犯罪者として拘束。
2年後に死刑が執行された。

|| || || || || || || || || ||

「……………これも違うんやろ？」

『ああ。実際は召喚は成功して、召喚獣『アルバトロス』は召喚されてしまった。それによってレジスタンスも管理局側も壊滅的被害を受けたんだけど——』

「特務一課が、任務を遂行した……………」

またもや特務一課だ。

大部隊が全力を挙げても、たった一部隊に勝てない。

その事実を突き付けられ、はやては背筋が凍った。

それからも延々と大事件と、特務一課の活躍の事が綴られている。

功績を上げる事に一つ、また一つと階級を上げていき、二等空佐まで上がったところで転機が訪れる。

情報二課から教導隊への出向だ。

なのはが機動六課の設立準備にかかりつきりになると同時期に教導隊へと出向した。

人を教導するのは苦手なだろう。

なのはのような『エースオブエース』などという看板もないため、教えを真面目に聞く人などいない。

最終的に全員が辞めたと聞く。

|| || || || || || || || || ||

その後、クロノ・ハラオウン提督の下で補佐官になると共に空佐から陸佐へと転向。

捜査中に、ジェイル・スカリエッティ事件が起こる。

クロノ・ハラウン提督と共に、艦隊を指揮し、聖王の揺り籠を破壊に成功する。

聖王の揺り籠破壊により、階級がさらに一つ上がり、一等陸佐へ。

その後、機動六課に転属。
今に至る。

|| || || || || || || ||

『経歴に関しては以上だよ。とりあえず大きな事件には必ず介入して、しかも絶対解決させているってこと。それから、特務一課の名前が出てるときは必ず彼が所属している部隊もその捜査に参加してるんだよ』

そこまで言われて、はやては一つの事実に突き当たった。

「……………まさか」

634 戦闘航空部隊。

情報二課。

機動六課。

”その全てに共通している事は。”

ピッ。

「シャーリー。今すぐに634 戦闘航空部隊と情報二課に関する資料を送って」

『八神部隊長？それはいつたい……………』

「ええから早くッ！」

『は、はい！』

はやてのただならぬ気配を感じて、シャーリーは急いで資料をかき集める。

数秒後、目の前に二つのウィンドウが現れる。

そこには――

+++++

「も～～う、はやてちゃんたら。…………グス」

皆からバッシングを受けたのがかなり悔しくもあり、悲しかったのだろう。

化粧室から出てきたシャマルは、がっくりと肩を落としていた。

「まあまあ。気にしちゃ負けだよ？」

「なのはちゃんだって真っ先にダメって言ったくせに……………」

「それは……………にやはは」

笑ってごまかすなのは。

微妙に引き攣った笑顔から察するに、できれば否定してあげたいが、それが難しい、と。

いったいどれだけシャマルの歌は酷いのだろうか……………。

「おゝゝゝ、ここがからおけか。初めてだがなかなか綺麗な内装をしているじゃないか。テーブルのせいで少し狭いが……………」

「来たことないのかよ…………。じゃなんでカラオケに行きたいなんて言っただんだ？」

「ちょっとした好奇心だ。姉は前からからおけというものが気になるっていたんだ」

部屋に戻ろうとして、隣の部屋から少々聞き覚えのある声が聞こえてきた。

顔を見合わせるシャマルとなのは。

「それでは飲み物をもってこよう。姉はコーラにするが」

「んじゃ俺はジンジャーよろしく」

「それじゃいつてくる」

ガチャリと音を立てて扉が開いた。

「……ん？」

「「あ……………」」

ぱたん。

くる。

てくてく。

「「ちょおつと待ったあああああ！！」」

完全に無視をして飲み物を取りに行こうとするチンクに、普段温厚な二人らしからぬ鋭いツツコミを入れた。

「ん？どうしたんだ？チンク」

最悪のタイミングで最悪な人物が現れた。

「け、ケーン・エイト一等陸佐」

「高町に、シャマル……………合コンか？」

「「違いますッ！！」」

2・0『アンフィニッシュド・ジョイント・パーティ』（後書き）

最近この作品を見返して思った事があります

『……………へただなあ〜』

そう。

理解はしていたつもりなのですが、伏線が意味不明だったり、文そのものがおかしかったりで、もう酷いのなんの。

この作品が一度完成させてから、書き直そうかと思っていたり無かったり。

というわけでアンケートをとりたいと思います。

リメイクをするか否か。

後、アドバイスなどをいただけたら幸いです。

では、また次回会いましょう。

『ん〜山田せぴあでした』

チャンチャン

3・0『ドント・カム・トゥルー・インヴォーク』（前書き）

土曜なのに学校がある件

3・0『ドント・カム・トゥルー・インヴォーク』

ミッドチルダ首都クラナガン。

高層ビルが立ち並ぶ間の路地裏を通り抜けた場所に、一つの映画館がある。

『アマナシス座』。

カッコつけたようで妙に外した名前だ。

そこに向かって歩く人影が一つ。

夜であるにもかかわらず、街灯ひとつ無いこの真つ暗な空間でも、空き缶や空き瓶につまづくこともなくひたすらに歩く。

ジジジ、と明滅を繰り返すネオンがやっと思えてきた。

人影はすでに30分、いや40分は歩きつづけただろうか。

しかし疲れた様子もなく、中に入っていく。

時折あるランプの明かりをたよりに、一番奥の部屋に入った。

意外と広めな部屋は緩い傾斜になっており、椅子がところせましと並んでいる。

誰もいないのをいいことに、真ん中に堂々と座る人影。

コーラも無ければポップコーンも無い。

ゆっくりと白い幕が上がる。

カタカタと映写機がフィルムを巻く音が鳴りながら映画が始まった。

どうやら日本の映画らしい。

舞台はとある中学校。

理不尽な教師や親からの解放を願った少年少女が軍の基地跡に住み込み、連れ戻そうとやってきた教師や親、はたまた機動隊等を撃退しながら自由気ままに暮らしていく、という物語だ。

裏のテーマとも言える、言葉ではない親子の絆も重要なファクターになっている。

素直に、羨ましい、とエリオは思った。

ケーンの紹介でここを知ってから、暇を見つけては足を運ぶ。

特に、落ち込んでる時なんてしょっちゅうだ。

何本も日本製の映画は見たが、これほど心に残った映画を見たのは初めてだった。

いい意味にしる悪い意味にしる。

「お父さん、お母さんとの、絆、か……………」

エリオは親に捨てられた。

実際は違くとも、親はエリオを見捨てた事にかわりはない。

実を言えば、エリオは自分が本当の息子ではないことに気付いていた。

+++++

偶然。

本当に偶然だった。

いつも何故か屋敷の裏の森には行かないようにと言われていた。
エリオは言われた通り、森には絶対に行かなかった。

しかし、友達とキャッチボールをしていると友達が間違ってボールを森の中に投げ入れてしまった。

入っではいけなかったが、ボールは回収しなければならない。仕方なく探しに行く。

すると、あることに気付いた。

『ここは藪が迷路になっている』。

明らかに人が踏み固めた道があり、藪の中には鉄製の網が張っていて、藪はそれに絡み付くように生えていた。

どんどん突き進んで行くと、開けた場所に出る。

薔薇が咲き乱れる広場。

真っ赤な絨毯がそこに敷き詰められていた。

その中心。

石碑がおいてある。

そこには、こう書いてあった。

『我等の息子、エリオ・モンディアル。此処に眠る』

+++++

それからしばらくはぎくしゃくした反応しか出来なかった。

しかし、それでも変わらず愛してくれる両親を、エリオもまた心から愛した。

それも僅か数ヶ月で……………。

「よう。最近よく会っな」

ふいに気配が増えていた。

いつの間にか映画が変わっている。

今度はカエルもどきの宇宙人が大暴れする長編アニメだ。

後ろを振り向くと、金髪の男が立っていた。

名前は聞いたことはないし、聞かれない。

エリオも、この男も、互いの名前を知らなかった。

エリオは男の手元に視線を移す。

そこには大量のキャラメルポップコーンと、2リットルペットボトルに入ったメロンソーダ。

古きよきレトロな劇場が、一気に安っぽくなってしまった。

+++++

カラカラとなっていた映写機も完全に止まった。

最後に幕が降りてくる。

今日はもう終わりだ。

「…………やるんだろ？WORLD REFORM」

「……………はい」

そっか、と小さく言って息を大きく吐いた。

「『馬鹿野郎はマジロンリー』ってか？……まったくいつまでたってもぼっち決め込みやがって」

声で分かる。

この男は本当にケーンを大事に思ってる。

「何時でも呼んでくれ。何時でも助ける」

そう言っただけで空になった2リットルペットボトルと、紙製のバケツを持って部屋を出た。

しばらくしてエリオも出る。

その顔は、来る時とは何かが変わっていた。

その何かは、本人にしか分からないだろう。

+++++

カラオケボックスの中で四人は歌う。

全員での大合唱。

ちなみにメインで歌ってるのは下手だ下手だと言われていたシャルである。

ヴィータ達の反応を見る限り、相当音痴ようだ。

しかし、

「すごい、すごいよ！シャル先生！すごくうまくなってる！」

「ふっふっふ……。俺の手に掛ければ音痴を人並みにすることなんて造作も無いッ！更にそのさきッ！つまり、アーティストに押し上げるのも可能なのだッ！」

「ありがとうございます！いきなり混ざっちゃった上に歌の指導まで」

「元々素材はいいんだ。少しコツを掴めば直ぐに上手くなるのは当然のことだよ、ワトソン君」

「すごいな。姉は驚いたぞ？本当に下手だったのか？」

「それはもう見る影も無いぐらい……………嗚呼、自分で言ってる悲しくなってくる……………」

なかなかシリアスな感じだったのに、僅か数十分でこんなにも和んでしまっている。

「それじゃ次だッ！行くぞッ！みんなッ！」

「「「おーーーーー！！」」」

+++++

「いやー！歌った歌った」

「ふふふふ……………これでシグナムやヴィータちゃんを見返せる……………ふふふ」

「しゃ、シャルル先生？大丈夫？」

「なかなか楽しかったな。私は姉として、妹達にこの楽しさを教えてやらねば」

各々しつかりと楽しめたようだ。

なのはが時計を見ると、既に00:00をまわっていた。

「そろそろお開きかな？名残惜しいけど」

「そうね。あ、ケーさん？」

シャルルが呼び止めた。

「ん？」

「ちょっと御手を拝借」

訝しがりながらも素直に手を出す。

ぎゅっ。

いわゆるハンドシェイクである。

「本当に今日はありがとうございました」

「いやいや、たいしたことをしたわけじゃないし」

数秒で手を離し、シャルルとなのははその場を後にする。

遠ざかっていく二人の背中を見送る。

「今日はこれくらいにしとくか？」

「むっ……」

口を尖らせながら上目使いで睨むチンク。

「え、っと、どうした？」

「なんでもない。帰るぞ」

そのままスタスタと歩きだす小さな背中をケーンは追いかけて行った。

+++++

ケーンと別れてすぐ。

シャマルはクラールヴィントを起動させた。

そのまま何かを調べ始める。

「どうしたの？」

「昼間にザフィーラが言った事覚えてますか？」

「えっと、『ここにいる全員がケーンを知っているはず』、だっけ？」

「ええ。だから、全員が知ってるなら、昔任務で一緒になったとかだと思ふの。それならクリアルヴィントのプロフィールバンクにある遺伝子データと一致するはずなのよ」

さらりとんでもないことを言う。

徹底管理されているはずの局員の詳細な情報を持っている。

人造魔導師のことで散々な目にあっている管理局は、こういった情報管理を更に強化した。

個人でデータを持っている場合、最悪データ抹消だけでは済まないだろう。

「あの、それって違法じゃ……」

「え？情報所有の許可は貰ってるわよ？管理強化される前に」

手が早いと言うか、何と言うか……………。

「さっき握手した時の皮膚データを遺伝子情報に変換して、検索、スタート」

ピッ。

「でた。やっぱりどこかの任務で……………え？」

「?どうしたの?」

驚愕。

まさか。

信じられない。

そんな感情が仮面となって張り付いていた。

なのはは回り込んでウィンドウを覗き込む。

「……………え？」

そこにはこう書いてあった。

『遺伝子情報一致率98.2パーセント。八神 圭治と同一人物で
ある可能性が非常に高い』

4・0『ディクレーション・オブ・ウォー』（前書き）

MGS4が面白い件

4・0『ディクレーション・オブ・ウォー』

次の日の朝。

無限書庫司書長室。

大きな机を囲んで豪快に寝そべってる人が一人、二人、三人、四人。部屋中には本が数十、いや数百、数千、より数万。

四人の内、並んで座ってる二人の男の周りに積んであるブックスタワーは相当ぐちゃぐちゃで、一つでも抜いてしまったら崩れてしまふんじゃないだろうかと思えるほどだ。

前衛的デザイン。

奇っ怪なオブジェ。

むしろCGで作った立体映像だと言われた方が納得するだろう。

対して、反対側に座る男女のペア。

同じように突っ伏してはいるが、ブックスタワーは綺麗に積まれている。

しかし、綺麗に積んでる男のブックスタワーは、他の三人より遥か

に高い。

「……………し、司書長。もう、むり……………」

「……………は、はは……………ばあちゃん……………くろあめ、ちょうだい……………」

「……………あ、ん、つく、んはあ。……………ふあっ、は、ん、ひあ!……………」

「……………あ……………なのは…………………………夜景が綺麗……………なところを予約して、りゅ、……………ぐ……………」

死屍累々。

一体何日徹夜をすればこうなるのだろうか。

こてんと頭が転がり、表情があらわになる。

メガネをかけた好青年の目の下には、まるで油性マジックで書いたような極太の隈が張り付いていた。

う…………………………あ…………………………と唸る四人組。

…………………………

その時、このカオスな空間の壁に取り付けられた端末が鳴る。

まるでホラー映画のゾンビのように、ゆらりゆらりと揺れ動きながら司書長と呼ばれた好青年が、壁際へと向かう。

「ふわぁ~~~~い？なんで~~~~すか？そろそろ~~~~ろ死に
そ~~~~うなんでちけの……」

眠気からか、全然舌が回っていない。

『ゆ、ユーノ君？大丈夫か？』

機動六課部隊長、八神 はやて。

その顔に困惑を貼付けて無限書庫へとやってきた。

+++++

所変わって会議室。

口字型に並んだ机とふかふかの椅子そこに対面して、はやてとユーノは座った。

「あんな、今日は聞きたいことがあるんや」

「ZZZZ……………」

「ゆ、ユーノ君!？」

「ふわっ、ね、寝てにゃいよ?」

とは言いつつも、半開きかつ隈付きの目は、今すぐにも寝たいと訴えていた。

「それで?ふあなして何だに?」

「あ、あんな?」

一度唾を飲み込んでからはやては言う。

「ケーン・エイトっていう人知って——」

スッ——

空気が、変わった。

ぞくつ、と。

はやての背筋が凍る。

「ユーノ君？」

「知ってるよ」

はやての発言にかぶせるように言う。

「それで？ ケーン・エイトがどうかしたのかい？」

冷や汗が頬を伝う。

さっきの眠そうなのとは違い、下手すれば殺されそうな、そんな空気を纏っている。

「……………それじゃあ、ケーン陸佐が質量兵器を使つとるのも知ってるんか？」

「うん。知ってる」

今度は即答だった。

「だって」

続けてユーノは、はやてが耳を疑うようなことを言い出した。

「彼にそれを提案したのは僕だからね」

+++++

ユーノがはやてと話している頃。

地上本部はパニックに陥っていた。

「緊急報告ッ！地上本部のコンピューターに何者かがハッキングを
うけていますッ！」

「なんだとッ！？急いでフレームウォールを張れッ！」

「フレームウォール展開ッ！すり抜けられましたッ！」

「E-TAGを作動ッ！な、そんな馬鹿なッ！？管理局のスパコン

でも三日かかる防壁だぞッ!？」

「ありとあらゆる防壁を張り続けるッ!」

「三秒遅らせるのが精一杯だなんてッ!」

「くそッ! 電源を落とせッ!」

「電源室を閉鎖、隔離を完了。メインケーブルを切断開始ッ!」

「……………ッ! 電源が切れませんッ!」

異常な速度のハッキング。

三分とかからずに地上本部のコンピューターの全てが乗っ取られた。

電子部門が秘蔵の防壁プログラム『Ωコード』を使ってもまるで効果がない。

どんなものでも解読に数年かかる暗号に変換するプログラムだ。

それはちゃんと成功した。

データベースから、制御プログラムから、他の何もかもがΩコードによって変換された。

しかし、それらを”もう一度Ωコードにかけることによって戻したのだ。”

最高の変換プログラムであるがゆえの徳性。

変換後が最高ならば、変換前は最低。

裏返した紙を分解して、繊維のひとつひとつ変化させるか、もう一度裏返すかのちがいだ。

今まで、誰にも想像出来なかった解除方法だ。

しかし、それだけで元に戻せるわけもない。

だが、それを可能にした。

画面に踊り出る『αコード』の文字。

『Ωコード』を解析して作った解除プログラムだ。

普通なら、暗号化したものをもう一度暗号化したならば、もう元には戻せない、という先入観をぶち壊した。

そして、数分後。

主犯からの犯行声明が届いた。

ミッドチルダの全てのモニターに割り込みをかけて生中継しているその映像は、数ヶ月前のジェイル・スカリエッティを彷彿とさせた。

『ミッドチルダ地上本部の皆さん。初めまして』

そこに映っていたのは”少女”だった。

『エネミー・スカリエッティ。先日あなたがたに殺されたクアット口の娘、……と言えはお分かりいただけるでしょうか？』

悪夢が、来た。

『すでにクラナガンに向けてヒューマン・ガジェットを発進させました。』

私の要求は、ナンバーズNo.4、クアット口の遺体の引き渡し。二時間以内に要求がのまない場合は、ロストログア『カーズ』によって製作した『アクシズ』の主砲を、『ジェネシス』をクラナガンに撃ちます』

+++++

「提案した、やて？」

「うん」

まさかとは思った。

しかし確証はなかった。

だが疑わしくはあった。

だからカマをかけてみようと思っただけだ。

634 戦闘航空部隊、特別監査官ユーノ・スクライア。

情報二課、特別監査官ユーノ・スクライア。

機動六課、情報提供者ユーノ・スクライア。

ケーンのいた全ての組織には、ユーノの名前があった。

何かしら知ってるかもしれない。

そんな軽い思いで来たら、

その結果がこれだ。

「……………なんでなん？」

これを言うのが精一杯だった。

「はやてはおかしいとは思わないのかい？」

A・M・F・とかの魔法無効化能力をもつ兵器が相手で、しかもその空間内で戦える兵士もいたのに、管理局は質量兵器を使用しなかった。

唯一使おうとしていたのはレジアス中将のみ。

それが有効だった証拠に、ジェイル・スカリエッティは真っ先にアインヘリヤルを破壊したよ？」

「せやけど、質量兵器が出回ってしもたら」

「何を言ってるんだい？」

既に出回っているじゃないか。

逆に、質量兵器を大量に蓄えた組織にテロを起こされたら、流石に管理局側が勝てるとは思えない」

「……………そのための質量兵器なんか？管理局に”質量兵器の有用さ

”を証明するために”

「ただ認めるって言っても信用なんてしてくれないからね。
そのための『アンチレゾンデートルウェポン（存在意義のない兵器）』だ」

その時、アラームが鳴り響く。

「な、なんや!？」

部屋の非常灯が光り、部屋は真っ赤に染まった。

「……………どうやら始まったみたいだね」

呟く。

小さく。

独り言のように。

「始まった、やて……?」

うん、と頷いて返す。

続けてゴメンね、と。

「『キャストル・バインド・リバーシブル』」

ピアスが輝き、はやての周りに光りが集う。

それはちょうど半円の形をとると、硬質化し、はやてをその中に閉じ込めた。

「砦の拘束・表裏反転。普通のキャストル・バインドは敵の攻撃を弾く、半円状のシールドなんだ。

半円状だと、上手く力のベクトルを逃がしてくれるからちょうどいい。

それを反転させると、内側に入った者は絶対に出られない。

バインドそのものが堅いし、なにより攻撃魔法を使ったら反射して自分に返ってくる」

はやてはさすがのような目でユーノを見る。

が、しかし、ユーノは、物事を淡々とこなす司書長の顔に戻っていた。

「私をどうするつもりや」

「そこにいるだけでいいよ。僕の目的は時間稼ぎだから」

そう。

少なくとも彼の思いがクラナガンのみんなに伝わるまで。

4・0『ディクレーション・オブ・ウォー』（後書き）

さあ、ラストバトルの始まりです

ちなみに、作者の中ではこれはまだ導入部分になります

そしてこれからは色んな物がごっちゃになってきますが、暖かい目で見てやってください

5・0『ジ・アウトブレイク・オブ・ウォー』

「事態は急を要するものであるッ!!」

ただっ広い講堂の中。

一人の老人が声を張り上げる。

武装隊榮譽元帥、ラルゴ・キールである。

現役を半分退きながらも、今だにその巖のような厳格さはカケラも失われていない。

「今回の主犯。エネミー・スカリエッティは、名前から察する通り、ジェイル・スカリエッティの娘に当たるとされている」

ざわざわと波紋が広がっていく。

「前回の二の舞になるわけにはいかない。諸君の中にもA・M・F・等の魔法無効化能力を持つ兵器に苦戦を強いられた者も大勢いることだろうと思う……」

思い出すのはまるで津波のように襲い掛かる大量の機械の群れ。

「しかしだッ！同じ轍は二度と踏まんッ！今回は特務一課の者が指揮をとるッ！……では、後は任せたぞ？」

そういつてラルゴはその場を明け渡す。

舞台袖から一人の人物が現れた。

トサカのような物がついた白いマスクを被り、赤く縁取られた黒いマントを全身に纏っている。

「《オハツニオメニカカル。

ワタシガトクムイツカブタイチョウダ。

クワシイスジヨウハアカセナイガ、……………ジョン・ドウ、トデモ
ヨンデクレ》」

変声機を使い、マントに仮面という出で立ちに演説を聞いていた局員はにわかに騒ぎ出した。

「あいつがあの特務一課なのか？」

「どんな事件でもたちどころに解決するという奴らだろ？ラルゴ元帥がいるんだし、信用は出来るんじゃないか？」

「そうだなラルゴ元帥が任せただ。実力はあるんだろ？」

口々に皆訝しながらも、『ラルゴ・キールの信頼がある』という言葉
葉を信じて、ジョン・ドウに従う事にした。

普通ならば、素顔を隠し、変声器を使ってるような者など信じられ
るはずがない。

それら全てを封じ込めるほど、ラルゴ・キールの名は力のあるもの
だった。

「《サツソク、ムカオウカ。
ゼンイン、シュツゲキセヨッ！》」

+++++

「艦長。全艦、配置についたようです」

ふむ、と綺麗に整えた髭を撫でる。

正面にはまるで小惑星を改造したかのような敵艦アクシズと、その
周りに無数に浮かぶヒューマンガジェットの群れ。

アクシズには、どのような兵器かは分からないがジェネシスと呼ば
れる主砲を持ち、ヒューマンガジェットは見ただけでも、それぞれ
手には体の半分以上ものサイズを持つ巨大なビーム砲を持っている。

宇宙空間へと集合した時空航行艦の数は83。

大きさや性能に差はあれど、この場で重要なのは速さや小回りが効く事ではない。

「アルカンシエルの準備は出来たか？」

つまりは、火力である。

時空航行艦にはアルカンシエル以外の武装は何一つ積まれていない。

圧倒的過ぎる、火力の差。

せめてまともに効いてくれればまだ勝機はあるのだが。

「何時でも発射体勢に出来るようにはしてありますが、……………効くかどうかは……………」

「A・M・F・か」

艦長はA・M・F・を積んだ兵器と相対したことはない。

ジェイル・スカリエツィ事件の時は別世界での調査をしていたため、直接の関わりは無かったが、魔法を無効化するというのは魔導師だけではなく、……………アルカンシエルも無効化されるかもしれない。

「実際の所どうなんだろうな」

『《ソレデハ、ケンシヨウシテミヨウカ?》』

まるで聞いていたかのようなタイミングで通信が入る。

『《マア、キイテイタンダガナ……………。》

ジクウコウコウカン、フラット。

シヨウメンノテッキニムケテ、アルカンシエルヲウテ》』

「……………どうします?艦長」

「……………やるしかないだろ。全員、持ち場に付け!」

その声を皮切りに、一斉に職員が動き出す。

準備は、ものの数十秒で終わった。

「エネルギー充填完了。最終安全装置、解除。効果範囲内に味方機なし。いけます」

副長が確認をとる。

艦長が頷いて鍵を取り出し、目の前のキューブに差し込む。

「『アルカンシエル』、発射！」

カチリ、と音を立てて鍵が回ると同時に、アルカンシエルが敵のど真ん中に放たれた。

……………が、しかし。

それらはヒューマンガジェットが作り出すA・M・F・に掻き消された。

『《フム。やはり、キョウメイシアウコトガデキルヨウダナ》』

機体同士の共鳴。

互いが同じ種類の力場を発生させたため、融合し、更に強力になったようだ。

「……………予想はしていたとはいえ、間近で見るとショックなものだな」

白い輝きが壁にぶち当たったかと思えば、霞のように消えていく。

これが切り札である管理局側からすればたまったものじゃない。

敗北は約束された。

『《トデモオモツテルンダロウ？

ソウイン、シュツゲキマエニツイカシタブソウニエネルギーヲオクレ。

オマエタチノゼツボウヲフンサイシテヤロウ』

仮面で表情は見えないが、フラットのクルーは感じた。

こいつ、笑ってやがる。

+++++

「準備は出来たか？」

時空航行艦、クラウドディア。

その格納庫に彼らはいた。

「はい、大丈夫です」

クロノの問いにエリオが答える。

「一応確認しておくぞ」

ケーンが声をかける。

「クロノはど真ん中で派手に暴れて、その隙間を塗って、俺とエリオがアクシズに向かう。エリオは俺の護衛。突入後は、脱出路の確保」

「突入口を守ればいいんですよ？」

「ああ。出口塞がれたらそのままおだぶつだからな。頼むぞ」

「はい！」

「僕は囃か。それで、武装は何を使えば良い？」

「今回に限り、制約はない。ここっという時に使ってくれ」

「了解した」

確認をとり、それぞれが自分の機体を着る。

足場から、出撃カタパルトに跳ぶと、下から上昇気流のような斥力場が発生し、そのまま空中に体を固定した。

すると、壁や床、天井から無数のアームが伸びてくる。

その先端には様々なパーツがくっついており、その場で装着と共に組み立てを行う。

フレームが腕に張り付き、ネジが巻かれる。

数秒後には、装着を完了した三人いた。

深緑の鎧に身を包み、両腕部には、巨大な龍の顎が。アギト

「いくよ、ストラダ。BIRDS、『スワロー』！エリオ・モン
ディアル、いきますッ！！」

極限まで無駄を省いた白い鎧。

守る、というよりは補強するといった意味合いが強い。

しなやか、かつ女性を思わせるようなフォルムには、『白鳥』の名こそが相応しい。

「U2S、お前の力をみせてやろう。BIRD2、『スワン』。クロノ・ハラウン、行くぞ！」

純白。

そう、純白だ。

曇り一つない真っ白なボディは、クロノのそれとは違い、いささかゴツイ印象を受ける。

見たところ武装らしい武装は、右手のビーム砲と、左手の巨大な盾のみ。

エリオとクロノの鎧は、胸や籠手、すね当てなど、重要な所ばかり守っているが、頭だけは何も無い。

それは、二人がこの装備、A・M・C・ウエポン（ANTI・MAGIC・CANCELER）に慣れていないからだ。

頭部の装備は頭を守るだけではなく、感覚器官に直接干渉し、反応速度などを無理矢理底上げする。

しかし、これは本来必要無いもの。

A・M・C・ウエポンは確かに便利ではあるが、自分の戦闘方法を確立させている者にとっては、何時もの感覚で戦う事が出来ないため、単純なミスが増えてしまうのだ。

だが、開発者であるケーンにはむしろいつもの感覚。

そして、熟練者のそれは、魔導師のレベルを遥かに凌駕する。

頭部にあるのは、天をも貫くかのように真っ直ぐのびる一本角。まるで神話に登場する一角獣のよう。

その名を、ユニコーンと呼ぶ。

「B I R D 1、『ガルーダ』。ケーン・エイト、出るッ!！」

その声と共に三羽の鳥達が、宇宙へ舞い上がっていった。

6・0『カミング・ザ・シックス・バード』（前書き）

超お久しぶり

超メタルギアやりたい

6・0『カミング・ザ・シックス・バード』

一方、地上本部中央広場は。

「おお、おお。やつこさん、随分奮発したみたいだな」

空に浮かぶ数千にも及ぶヒューマンガジェットの群れを見ながら、
ヴァイスが言う。

「この程度で済んで良かったです。下手すればこの数倍は相手にしなくては いけませんでしたから」

隣に立つグリフィスが冷静に言う。

「まるで、楽勝だと言ってるように聞こえるんだけど？」

「そんなわけではないでしょう。でも、」

グリフィスがポケットから小さな箱を取り出す。

その中身は本人しか知らない。

「負けるつもりはカケラもありません」

「そりゃ随分と大きくでたな」

でもな、と続ける。

「……………それ、死亡フラグだぞ？」

「！？お、大きなお世話です！」

そうこうしているうちに、飛来してくるヒューマンガジェット群は近づいてくる。

その内の一機はその場でホバリングし、手にした砲をこちらに構える。

キュイイイイ……………、というチャージ音を発しながらスコープを覗き込み、狙いを二人に定めるが、

桃色の閃光が、スコープごとヒューマンガジェットの頭を撃ち抜いた。

ヴァイスだ。

いつの間にかヴァイスの手には2メートルは超える巨大なライフルが握られていた。

「冗談はこれぐらいにして……、そろそろやりますか！ 『A・M・C・ウェポン、LEVEL1、転送』！」

ヴァイスとグリフィスの真下に魔法陣が輝きだす。

真っ白な魔法陣は真上にも現れ、二人を円筒の光りで包み込んだ。

周囲には更に細かい魔法陣が浮かぶ。

その数は百を優に超えているだろう。

一つ一つに転送魔法が組み込まれていた。

ポツ、ポツという明かりとともにパーツが送られてくる。

大きな物から小さいものまで、サイズは様々だ。

円筒の中で組み立てが始まる。

そのための上下の魔法陣。

一瞬だけ魔力光が膨らみ、光りが爆発した。

ヴァイスの体を覆うのは深緑の鎧。

体全体を覆い隠し、腕には巨大なライフル。

頭部にはV字のアンテナがついている。

グリフィスには暗い青色の装甲。

巨大なツインガトリングキャノンが両腕に、計四本付いている。

そして、メガネの上に組み立てられる補助ゴーグル。

「Bird 4、『イーグル』！撃ち抜くぜッ！」

「Bird 3、『スパロウ』。目標をたたき落とす」

ロングレンジライフルと、ツインガトリングキャノンが火を噴いた。

+++++

先の事件によりアースラが完全に廃艦になったため、機動六課には大気圏外へ出れる方法はない。

現在、機動六課の面々はヴァイスとグリフィスが守る地上本部の屋上で待機していた。

ついさつき二人に戦力外通告を受けたばかりだった。

しかし、いずれもジェイル・スカリエツィ作のガジェットやナンバーズと高濃度A・M・F・空間内で戦い、生還した猛者ばかり。

無論、そんな一方的な通告に納得出来るはずもなく、こうして屋上まで出てきたわけだ。

たった二人でヒューマンガジェットの群れを相手するなど愚の骨頂。

しかし、戦闘が始まって20分にもなるが、

「隙が……なさ過ぎる」

歴戦の勇士、シグナムが思わず呟く。

グリフィスが銃弾とミサイルの流星群を吐き出し、零した所をヴァイスのスナイピングで撃ち抜く。

完璧な連携。

そして驚くべきはその集中力。

これだけの数の敵を前に、臆せず、冷静に相對していた。

「でも、あの程度ならアタシ達だってやれるだろ。何で前線から外したんだ？」

ヴィータが不満をこぼす。

「もしかして、『アレ』とかんけーあんのか？」

そう言つて上を指差す。

そこにはゆで卵を輪切りにしたかのようなならかな円錐形のポッドが浮かんで、いや、落ちてきた。

とてつもなくデカイパラシュートを開きながら屋上に着地する。

てっぺんからパカッと割れ、一体のヒューマンガジェットが姿を表した。

深緑のアーマーに標準的なモノアイ。

唯一の特徴と言えば角が一本生えているぐらいだが、不自然な事に武装らしい武装が無い。

「ずいぶん手を抜いたんですね」

「キャロ、気を抜いちゃだめよ。スバル行って！私が援護する」

「オツケー！『ウイング・ロード』ッ！」

デバイスを起動すると同時に、リボルバー・ナックルで地面を殴り、ヒューマンガジェットを囲むようにウイング・ロードを展開――
しなかった。

「あれ！？」

「フム：A・M・F・に特化した機体というわけか。ランスター、下がってる。こいつに射撃は効かない」

「は、はい」

ザフィーラの言葉を受け、下がるティアナ。

「なら、『振動破砕』で！」

スバルの瞳が金色に輝き、全身が高速で振動する。

だが、

スバルが走り出す前に、ヒューマンガジェットはスバルの懷へ飛び込んだ。

「ッ！？」

機械とは思えないほど滑らかに、かつ流れるようにアッパーが繰り出され、スバルの体は大きくのけ反る様になる。

そのまま後ろに転がるように離脱するが、ヒューマンガジェットは更に突っ込んでくる。

「オラアアッ！」

すかさず人型になったザフィーラが拳を繰り出す。

スラスターの逆噴射で急ブレーキをかけ、拳が顔の真横を空振りしてから、がら空きのボディにパンチを打つ。

「ぬぐ、その程度かアッ！」

密着した状態では打撃に十分なテイクバックをとれないため、必然的に威力は落ちる。

しかし次の瞬間。

ヒューマンガジェットの肘から青い炎が噴き出て、腕が加速。

ザフィーラを吹き飛ばした。

「ぐあッ！」

さらに左足の踵からも炎。

ザフィーラの頭を蹴り抜くと、その勢いのままに半回転し、今度は右の踵で頭を狙う。

くいつ、と。

間一髪シグナムの手が間に合い、ザフィーラを引っ張る。

ブォンッ！、と目の前で唸る風に、思わず身震いした。

「アアアアアアアッ！！！」

入れ代わりにスバルが真上から仕掛ける。

跳び蹴りを避けようとステップを踏むが、

「いつけええええッ！」

背後からグラーフアイゼンが迫る。

ドゴンッ！と凄まじい轟音を立てて、胸と腰に鉄塊が激突した。

「やったか!？」

胴体のパーツにヒビが入るが、それまで。

機能停止とまではいかなかった。

「くそ、やっぱり魔法が使えないとこんなもんか……。スバル!もう一発行くぞ!」

「はい!」

即座に二撃目に移るが、ヒューマンガジェットはスバルの足を掴み、振り回す。

そのままヴィータも巻き込み、コンクリートの上に投げ出された。

人間二人分のの重さの物を投げて体勢が崩れた所に、ザフィーラの拳が突き刺さる。

スバルの蹴りでヒビを入れた場所に更に負荷がかかり、ついに装甲を砕いた。

ゴロ、ゴトン、ゴロツ。

破損した装甲が落下し、重厚な音を立てる。

そこにシグナムは見た。

剥き出しになった内部。

その中にある黒い装甲。

「どうやら……パンドラの箱を開けてしまったようだな」

直後、全身の装甲があらかじめ仕掛けられていた爆薬によって弾け飛んだ。

一分のすきもなく包んでいた深緑の装甲が無くなり、黒い物の正体が姿を表した。

図太かった手足が細くなり、より人間らしい体型になっている。

全身は真っ黒で角付きの鋭角なデザインの頭部パーツと青白く光るデュアルアイ。

胸部の装甲には白い文字でこう書いてある。

『Bird 6、ファルケン』と。

「特務一課だとッ!？」

何故。

機動六課の男性陣を取り込み、クラウドディアすらも手に入れ、そして何故今こうして牙を剥く？

(まさか……………)

最悪の考えがシグナムの頭をよぎる。

（スカリエッティに作られた新たな戦闘機人ツ！？）

フォワード陣から聞いていた。

ケーン・エイトは義肢であると。

装備を自由に換装するタイプ？

スカリエッティの作品ならば、破壊することに躊躇がないことにも納得できる。

「……………」

シグナムはレヴァンティンに手をかけ、

「オオオオオオオオオオオッ！！！！」

ファルケンに切り掛かった。

それに対してファルケンは腰のハードポイントからククリ刀を抜く。

二つの刃がぶつかり、盛大に火花を散らした。

+++++

「…………気づいたか？スバル」

「……………はい……………」

肘のからの推進力による加速や、こまかい身のこなし。

拳動の一つ一つがある人物にかぶってしかたがない。

それは懐かしくもあり、ひどく哀しい人。

そしてスバルの最愛の人。

「イヴ……です。間違いない」

かつて、いや今もこの機動六課に在籍し、現在はクロウツェル総合病院の地下深くで眠りにについている少年の名だった。

（クラウドディアに乗っていったのはとシャルは気になるし、フエイトは引きこもり。はやてに至っては連絡すらつかねえし、そのうえイヴまで…）

空には閃光が輝き、さらにそのもつと上では大規模な艦隊戦。

まさに、守護騎士達がかつて見た古代戦争そのものである。

「いったい、何がどうなってやがんだ……？」

いやに馴染む空気の中、ヴィータの問いは風に流され、消えていった。

7・0『バックドア・デューリングス・アンド・リーズン・オブ・ア・バトル・

受験って大変だにえ

後書きにアンケートがあります

少し迷ってるので、皆さんのご意見をお願いします

7・0『バックドア・デューリングス・アンド・リーズン・オブ・ア・バトル』

「……………おかあ、さん？」

とある一年中雪に覆われた星で。

凌辱された一人の少女とその母親。

そして物言わぬ肉塊が転がった部屋の中。

そこに小さいながらも確かに声が響いた。

弾かれるように振り向いた女性の視線の先には、隣で壊れているはずの少女が何事もなく立っていた。

「……………え、……………エネ、ミー……………?」

どれほど不安だったのだろうか。

エネミーと呼ばれた少女は瞳に涙をいっぱい溜めながら、母親に抱き着いた。

わけがわからない。

それが頭の中を支配していた。

「気分はどうだ？クアットロ」

不意に声が聞こえた。

「最悪」

だろうな、と言いながらクスクス笑う。

扉の近くには一人の男が立っていた。

女みたいに長い髪をオールバックにして、ゴムでまとめて縛っている。

「君の娘さんが危ないという情報を得てな。有り体に言えば助けにきた。あれはよく出来た、…」

ピっ、と手元のリモコンを操作すると、倒れている方のエネミーはしゅるしゅるとしぼんで手の平サイズまで小さくなった。

「偽物だ」

「私は犯罪者だし、この娘はドクターのクローンっていうのも知ってるんですよ？」

「まあな」

「それで？何が目的なの」

「ああ。実は――」

.....。

.....。

.....。

...

「.....最初はここで、次に宇宙で。.....だいたい分かったわ。そのかわり、戸籍とそれなりの施設を寄越しなさい」

「ああ。ついでに金もやる。有りすぎて困ることはないだろう」

「.....あなた。一体何者？」

そつすると男は腕を組んで少し考える。

「そつだな。… CODE ZEROとでも呼んでくれ」

「CODE ZERO?」

「名前の由来は、未来予知だ。それじゃ、商談成立ってことで」

ずっと右手を差し出すCODE ZERO。

「未来予知。なるほどね、それでエネミーを」

クアットロはゆっくり腕を延ばして、CODE ZEROの手を掴む。

「それじゃ、よろしくおねがいします。共犯者さん」

+++++

「おい、圭治!」

暗闇の中に瞬く星達。

その隙間を縫うように、三つの流星が突き進んでいた。

「なんでこのルートにヒューマンガジェットがいるんだ!？」

「知るか!そんなことこつちが聞きたいわッ!」

「エネミーに連絡しろ!連絡先はお前しか知らないんだ!」

「分かった!少し頼むぞ!」

エリオが周りのヒューマンガジェットをストラーダで切り捨てるが、直ぐさま入れ代わりにやって来た機体にガトリングを撃ち込まれる。

クロノはケーンの側を離れないように旋回しながら魔法を撃ちつつけるが、このままではキリがない。

本来、この作戦は管理局にA・M・Fの脅威を正確に認識させ、質量兵器の実用化を促すためのものだった。

ジェイル・スカリエッティ事件の爪痕は深い。

それも、魔法無効化能力を持つ A・M・F・に対策をうつことが遅れてしまったからだ。

しかし、質量兵器ならば A・M・F・に関係なくダメージを与えることができる。

そのためクアットロと取引をし、エネミーにも協力してもらったわけだ。

無論、クロノが破壊したサイコの中にはクアットロはいない。

全てが自作自演のお伽話だ。

この後の段取りとしては、カーズで作ったアクシズをミッドに落とし、それを特務一課が破壊する、という流れだった。

一度滅亡寸前まで追い込む事により、それを救ったものを人々は救世主と呼ぶ。

その前段階として、アクシズにたどり着かなくてはならない。

今三人がいるのは、ヒューマンガジェットを配置していないルートだ。

しかし、何故かこうして戦闘を続けている。

「エネミー、なんでφルートにガジェットがいるんだ！？ここには配置しないはずだろう！」

『ザ、ザザザ、ザ…………ザザザザ』

「チツ、繋がらない。エリオ、ここは任せた。オレはアクシズに行く」

「任せました！」

エリオはストラダを大きく振り回し、魔力刃を飛ばしてヒューマンガジェットを切り捨てた。

「圭治！」

クロノがケーンを引き止める。

「気をつける。もしかしたら奴が動いたのかもしれない」

「…………ああ」

スラスターを全開にしてその場を離脱。

一人アクシズへと向かった。

+++++

「何度見てもすげえなオイ」

クラウドディアのブリッジ、艦長席。

赤い縁取りのついた黒マントを羽織っている男が座っていた。

傍らにはトサカの付いた白いマスクを置き、くっくくくと心底おかしそうに笑っている。

「『輻射波動結界』。A・M・C・ウェポンの第一号機。ヒューマンガジェットがああ赤いカーテンにぶつかる度に勝手に爆発してくぞ。見る、人がゴミのようだ！」

「いや人じゃないし。機械だし」

「ツツコミが冷静過ぎるわ！」

いいじゃないか言っただって、と膝の上のの字を書く。

「ジヨウサン。もう少し真面目にやったらどうだ？バイト代は貰ってるんだし」

「おいおい違うだろ？俺はジヨウサン・ジョーカーじゃなくて、ジョン・ドウ。それがもしなのはの耳に入ってみろ。この計画の全てが終わりなんだぞ？少しは気をつけろよ、海」

「ジヨウサンじゃ分らないと思うけど…。それにお前だって俺の名前言ってるじゃないか」

「それこそ分からんだろ。小学生の時の同級生が管理局にいるなんて思わないさ」

そう二人の男達は語る。

通信機を片手に席の一つに座る男、阿部 海は十年ほど前、高町なのはの同級生だった。

彼の両親は地球の駐在局員で、小学生卒業と同時にミッドチルダに移り、今は管理局員として地上本部で働いている。

「それで、これが終わったらお前はどうすんだ？また旅にでるのか？」

ジヨウサンは金髪をガシガシと掻く。

「いや、部隊を作ろうと思う」

海が驚きに眼を見開いた。

「もう俺が知ってる歴史とはまったく違ってるんだよ。だから達観してるわけにはいかない。前も言っただろ？ キャラは殺したくないんだよ。物語はハッピーエンドで終わるべきだ」

「……そっか。お前も変わるんだな」

「変わったのは馬鹿野郎だよ。シスコンに磨きがかかってやがった」

「ふふっ、確かに」

ウィーン。

「あ？」

「え？」

「ふえ？」

「あら？」

突然。

本当に唐突に扉が開いて、二人の女性が入ってきた。

扉の前には見張りがいただろとか、なんでこの艦に乗ってるのかとか聞きたいことはあるが、二人はまったく別の事を考えていた。

来たのは守護騎士のシャマルと、さっきまで話しに出ていた高町なのは。

（（……まずくない？）（）

さっきはバレるわけがないと高を括っていたが、いざ本人を目の前にするとビビりまくる二人だった。

7・0『バックドア・デयरリングス・アンド・リーズン・オブ・ア・バトル・

さて、アンケートなのですが、

現在、BirdのみんながA・M・C・ウエポンを装備してますが、物語が進むにつれてLEVEL2に変更します。

その時の武装について、『これとかいいんじゃない？』という物があれば、どしどし送ってください。

ケーン『ユニコーン』

クロノ『F91』

グリフィス『EW版ヘビーアームズ』

ヴァイス『デユナメス』

エリオ『ナタク』

今はこんな感じです。

できればそれぞれの特性と絡めていただけるとやりやすいです。

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3679m/>

魔法戦士リリカルなのは-宙を見上げる無限のワルツ-

2011年11月11日18時57分発行